

# 教職大学院 Newsletter No. 186

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since 2008.4 2024.8.30 (公開版)

## 福井大学の海外展開：マラウイ共和国における教師の専門職学習コミュニティネットワーク構築プロジェクトを通して

総合教職開発本部国際教職開発部 沼尻卓也, William Tjipto, 半原芳子

福井大学では現在、世界と肩を並べる教育研究環境の構築を目指すとともに、自らを国際化し、かつ世界との往還の迅速化により地域の国際化を牽引するため、国際化戦略を推進しています。その中で国際教職開発本部ではアフリカ・アジアを重点地域とした交流促進と国際展開等を行ってきました。今回はその中でもアフリカ南部のマラウイ共和国における教師の専門職学習コミュニティネットワーク構築プロジェクトについて、紹介できればと思います。



参加しています。そういった背景の中で、2022年12月からJICA 草の根事業「マラウイ共和国における教師の専門職学習コミュニティネットワークの構築」に取り組んでいます。具体的なプロジェクト目標として、「ナリクレ地区の教員が、教師の学び合いの場（プロフェッショナルラーニングコミュニティ）の意義を理解し、自発的に取り組み始める」ことを据え、その手立てかつアウトプットとして、「ナリクレ地区において、学校や学年、教科等を超えた教師の学び合い（mutual learning activity）を通じた教師間の協働関係が強化される」とことと「ナリクレ地区で実施される授業研究に教師の学び合いの視点が取り込まれ、質が向上する」ことに取り組んできました。

本プロジェクトではナリクレ教員養成大学（以下、NCE）及びナリクレ附属中等学校（以下、ナリクレ附属）をカウンターパートとし、教師の力量形成を企図しました。ナリクレ地区は首都リロングウェの郊外に位置しており、教員養成大学であるNCEの建物は在マラウイ日本国大使館の草の根・人間の安全保障無償資金協力によって建てられています。今回のマラウイ訪問（2024年6月17～25日）では、プロジェクトのまとめに向けた進捗と課題の確認と、プロジェクト終了後のカウンターパートとの協働及びプロ

### I. 本プロジェクトの背景と目標

マラウイ共和国では1994年の初等教育の無償化に伴い、初等中等教育の就学者数が増加した一方、有資格教員の不足による教育の質の低下が問題となってきました。こうした状況を受け、国際協力機構（以下、JICA）は2004年から現職教員研修の拡充に取り組んできました。そこでは、知識伝達型の授業から子供中心・探究的な授業への転換が目指されてきたものの、容易ではなく、日本を含め21世紀における世界の教育改革の課題となっています。本学にも2016年から2022年まで、合計14名の方がJICAの課題別研修で

### 内容

巻頭言	(1)
院生自己紹介	(6)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(27)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(30)
7月ラウンドテーブル報告	(34)
7月月間合同カンファレンス報告	(47)
事務連絡	(52)

ジェクトの発展可能性を探ることが目的になっていました。

## II. 地域の学校の取り組みを支えるナリクレ教員養成大学とナリクレ附属中等学校

本学と2020年2月に大学間学術協定を結び、本プロジェクトのカウンターパートであるNCEは、本学と同じ学校拠点のアプローチでナリクレ地区だけでなくマラウィ国の学校の取り組みを支えているという最大の特徴を持っています。また、NCEで教育学学士にアップグレードするプログラムを受講している現職教員がおり、こういった主体的で協働的な学びは教員の生涯に渡る学びを支える仕組みにつながっていくのではと期待されています。現在NCEのレッスンスタディ（以下、LS）グループは、チームコーディネーターのKondwani Vwalika氏を含む17名のスタッフで編成されており、ナリクレ地区にある6校とそれ以外の学校2校の合計8校における授業研究活動の支援などを行っています。それぞれの学校には、2023年1月に行われた授業研究オリエンテーションに参加した2～3名が主にコーディネーターとして、授業研究活動を支える仕組みになっています。しかしながら、今回LSチームとの打ち合わせや学校訪問のなかで、LSチームが思うように学校に行けていない状況にあることが分かりました。その背景には、学校訪問そのものが大学の社会貢献の側面が強くスタッフが他の業務を優先しがちであること、日当が支払われないこと、またNCEの公用車があるもののそれがなかなか使われない状況等、様々な問題が挙げられました。そのような多くの問題がある中、今回の訪問中にLSチームのメンバーから、まずは担当に関わらず学校の近くに住むスタッフが足を運んだり、直接行けない場合はオンラインを活用したりするなどの工夫ができるのではないかと提案がなされました。また、NCEの学生がナリクレ地区の学校で教育実習に取り組む際はLSメンバーを含むNCEの教員が学校を訪ねているということで、今後そうした既存の枠組みを活用することで、継続的な学校訪問の実現に努めることが確認されました。

また、今回の訪問を通じて、本プロジェクトのカウンターパートであるナリクレ附属では、現職教員研修として、授業研究をはじめ、ナリクレ地区の学校の教員の研修がいくつも行われていました。具体的には、校長研修（1学期に2回、年間6回）と副校長研修、各学校のDepartmentリーダーが集まるミーティング（1学期に2回、学期の中間と最後）、さらには校長・副校長・Departmentリーダーが一同に会するマネジメントミーティングです。今後、それらの研修にNCEのLSメンバーが関わっていくことで、ナリク

レ地区の学校の授業研究と教員研修の高度化が期待されます。

## III. その他の学校の状況

今回の訪問ではナリクレ地区6校とNCEより提案のあった2校を訪問し、すべての学校訪問においてNCEのLSチームメンバーが同行していただきました。学校訪問では、校長との面談後、先生方とのカンファレンス（協働省察）を行ってきました。各学校では授業改善や教師の学び合いに取り組んで（取り組もうとして）おり、学校独自の工夫や課題、挑戦が共有されました。その中で、今回印象に残ったエピソードや課題について共有していきたいと思います。

NCEから車で10分ほどのところにある学校では、先生方から授業研究への強い熱意とその効果について語られました。教員数は21人（うち2人は休職中）、生徒数は428人の学校ですが、同校では月に3～4回授業研究を行っており、教員が協働で授業計画を立て、お互いの授業を見合い、ふり返しを行っているとのことでした。授業研究の効果として、生徒のテストの成績が上がったことが挙げられ、大学に進学した生徒もいるとのことでした。その成果の理由としては、指導する際の苦手分野の克服に非常に有効であり、また授業計画を複数の教師で行うことにより無駄をなくすことでシラバスをこれまでよりも早く終わらせることができたといった具体例もあげられました。また、学校全体として、授業研究を通じ教師の力量の向上や教員同士のコミュニケーションの改善を感じているということでした。



写真：教室でのカンファレンスの様子（現地のJICA海外協力隊も参加）

また、別の学校では本プロジェクトの大きな課題が挙げられました。その学校には2023年度には3人のコーディネーターがいたのですが、1人は退職、1人は転職、1人は病気休暇中のため、現在LSコーディネーター不在の状態でした。また、全校生徒数は午前クラスが704名、午後クラスが467名いるのに対して教員はわずか9名ということで、中等の教員資格を持たない教員が教えている（教えざるを得ない）

状況にあることなど、学校が置かれている厳しい現状が浮き彫りになりました。今年の1学期は干ばつや洪水などの自然災害で保護者が学費を工面できず、約20%の子どもが登校できない状態だったということです。その後多くの家庭は無事に学費を払えたものの、今年も学費や児童婚の問題などで退学する子どもが出ているとのことでした。そうした厳しい学校の状況にあっても、先生方は地域、保護者の方と共に問題改善に努めていること、また教員同士でも連携し協力し合っているということでした。授業研究についても、そういった問題解決の糸口になるのではと大きな期待を寄せており、早急に短時間でもよいので教員に授業研究に関するワークショップを開いて欲しいとの要望がLSチームに寄せられました。

IV. 今後に向けて

知識伝達型の授業から探究的な授業への転換は、日本を含め世界の教育改革の共通の課題であるのですが、それは一つの国や地域で成し得ることは難し

いのが現状です。本学では、本プロジェクトを通じマライの先生方との協働による取り組みを進めていますが、今回の訪問を通じ見えてきた進捗と課題、そして現場(先生方や関係者)の声からは非常に多くの気づきや学びを得ることができました。また、今回の訪問では、NCEの仕組みやNCEと附属の関係性が本学と似ていること、現場において授業研究を行う時間確保の難しさなど、我々との多くの共通点を感じました。また教科書・教材不足、教員不足、予算不足など日本よりも過酷な状況の中で、様々な工夫を用いながら少しずつでも改善しようとするNCEのLSチームメンバー、学校の教員の方々から多くのことを学ばせていただきました。

我々の訪問の後、LSチームメンバーのNCE講師、ナリクレ附属校長と教員の3名が福井大学で研修に参加しました。その中のお二人の報告も簡単ですが紹介したいと思います。

## REFLECTION REPORT ON THE TRIP TO JAPAN

### Nalikule Demonstration Secondary school/Head teacher **Mercy Phiri**

“Education is not only what we get in the confinement of a classroom. One gets more educated through travelling and exposure to other cultures.” This statement came to reality when I, Mercy Phiri, in the company of my two colleagues had the privilege to attend a lesson study training at the University of Fukui in Japan. Though seemingly brief, the ten-day visit was characterized by training, school visits, and roaming around the streets of Fukui and Tokyo. Riding local trains and tasting local Japanese food in the restaurants of Fukui City made us more cultured than we previously thought we were.

It was a nice experience which had enriched the knowledge that we already had on lesson study. These ten days gave us an opportunity to see how lesson study is conducted in Japan. We also had a chance to visit some schools and participated in the Fukui Roundtable Summer Sessions. The collaboration between the University of Fukui and the Attached School is worthy to be emulated by the Nalikule College of

Education and Nalikule Demonstration Secondary School.

Lesson study is a collaborative way of learning and, in Japan, lesson study is put in the timetable and is well-planned while one is preparing their own schemes of work. At the attached school, teachers already sit according to departments which makes it easy for them to help each other to discuss and plan together as well.

Another area of learning was seeing a science lesson at the attached school where students were given an assignment to carry out an experiment. The students were well-organized, doing the assignment on their own, sharing the findings within the group, then going to another group and sharing again to the other group.

At one of the school visits to Shimousaka Elementary School, we were so flattered and impressed that they posted information about Malawi on their notice board. When they heard they were expecting visitors from Malawi, they used Google to find information and pictures, such as the flag of Malawi and of William Kamkwamba, the one who harnessed the wind.

I appreciated the visit as it has enabled us to see how lesson study is conducted in other parts of the world. As the saying goes, “it is one thing to learn and the other to put into practice,” I will personally put into practice and implement the idea of having members of the same department or subjects seated together in the staffroom, as this will help them easily plan together and share notes easily. In addition, we have all along been looking at the students’ performance in lesson

planning, but I have discovered that there is more to it.

The study visit, though seemingly short, will go a long way, as the three of us will continue collaborating and implementing what we learnt in order to enhance the efficiency and effectiveness of our college, adjoining secondary school, and subsequently the entire education system in Malawi.

## 日本訪問報告書

### ナリクレ附属中等学校 校長 マーシー・フィリ

「教育は教室に閉じこもって受けるものだけではありません。旅行や他の文化に触れることで、より教育を受けることができます」。この言葉は、私、マーシー・フィリが同僚 2 人とともに日本の福井大学で授業研究研修に参加する機会を得たときに現実のものとなりました。一見短いように見えたが、10 日間の滞在は研修、学校訪問、福井と東京の訪問が中心でした。福井市内の列車に乗り、レストランで地元の日本料理を味わったことで、些細なことかもしれませんが、私たちはより教養を深めることができました。

今回の訪問はまた、授業研究に関する私たちの知識を豊かにしてくれた素晴らしい経験になりました。この 10 日間で、日本で授業研究がどのように行われているかを知る機会となりました。また、いくつかの学校を訪問し、福井ラウンドテーブルのサマーセッションに参加させていただきました。福井大学と附属学校の連携は、ナリクレ教員養成大学とナリクレ附属中学校も学ぶ価値があります。

授業研究は共同学習の方法であり、日本では授業研究は時間割に組み込まれ、各自が自分の学習計画を準備している間によく計画されます。附属学校では、教師は既に学科ごとに着席しているため、互いに助け合って議論したり一緒に計画したりすることも簡単です。

もう一つの学習分野は、附属学校での理科の授業を見学したことです。生徒は実験を行う課題を与え

られました。その活動の中で、生徒はよく組織化されており、課題を自分でこなし、グループ内で発見したことを共有し、次に別のグループに行き、また別のグループと共有していました。

下宇坂小学校への学校訪問の 1 つでは、彼らがマラウイに関する情報を掲示板に掲示していたことにとっても感銘を受けました。マラウイからの訪問者がくると聞いたとき、彼らはマラウイの国旗や風力発電を利用した発明家ウィリアム・カムクワンバなどの情報や写真を Google で検索しました。

この訪問で、世界の他の地域で授業研究がどのように行われているかを知ることができたことに感謝しています。「学ぶことと実践することは別物」ということわざにあるように、同じ学部や学科の教員を職員室と一緒に座らせるというアイデアを私の学校でも実践したいと思います。こうすることで、一緒に計画を立てたり、情報を共有したりしやすくなります。さらに、私たちはずっと授業計画における学生のパフォーマンスに注目してきましたが、それだけではないことも今回わかりました。

この視察は一見短いようですが、私たち 3 人が協力し、学んだことを実践し続けていくことで、私たちの大学、隣接する中学校の効率と効果が高まり、将来マラウイの教育システム全体に対しても大きな成果が得られるでしょう。

# My experience at Fukui 2024 training

**Nalikule Demonstration Secondary school/Science teacher Mary Kalisha Chiputu**

I had an opportunity to be part of the team that visited the University of Fukui from 1st to 6th July 2024. It was an educational trip. Though I didn't spend much time in Japan (one week), but I learnt a lot. The people were warm and they welcomed us.

I had a chance to visit different schools (the attached schools, a rural primary school, and another junior high school). From this I learnt a number of things regarding lesson study and school culture which I will surely implement in work as a teacher. The learners in all the schools that I visited were organized. The learners knew what to do and when to do it. This spirit must be cultivated in the learners from a tender age so that they grow with it.

The learners in all of the schools we visited also have a sense of ownership. For example, some assume the role of librarian whereby they are able to lend books to their friends and keep

the records. Even us in Malawi, we must cultivate this spirit in our learners.

From the tour we had, we saw the good sitting plan in the staffroom that encourages interactions among teacher groups. This is positive development towards participation in lesson study meetings.

In all of the schools I visited, the teaching method used was inquiry learning. This has helped them to cultivate curiosity in the learners. Our learners must grow with an inquiring mind. They have to be able to inquire whatever they come across with.

As teachers, we must be up-to-date as knowledge is not static. Knowledge changes now and again so lesson study is important in making teachers up-to-date. Even for us to cultivate an inquiry method, lesson study is the way to go since when teachers meet, they can exchange knowledge that will make them change their attitudes.

## 2024 福井での研修の経験について

**ナリクレ附属中等学校 教諭 メアリー・チプトウ**

私は、2024年7月1日から6日まで福井大学を訪問したチームの一員になる機会を得ました。それは簡単に言えば、学びの旅になりました。日本にはあまり長く滞在しませんでした(1週間)、多くのことを学びました。人々は温かく、私たちを歓迎してくださいました。

私はさまざまな学校(附属学校、田舎の小学校、別の中学校)を訪問する機会を得ました。この経験から、授業研究と学校文化に関する多くのことを学びました。これは今後の私の教師としての仕事に必ず取り入れたいものになりました。私が訪問したすべての学校の生徒は組織化されていました。生徒は何をすべきか、いつすべきかを知っていました。こういった精神性は、生徒が成長できるように、幼い頃から育てなければなりません。

また、私たちが訪問したすべての学校の生徒は、オーナーシップの意識も持っていました。たとえば、図書館員の役割を担い、友達に本を貸したり、記録を保管したりできる生徒がいました。マラウイの生徒にも、この精神を育てなければなりません。

附属の訪問では、職員室の座席配置が教師グループ間の交流を促す良いものになっているのを目にしました。これは授業研究会議への参加にむけて、非常に重要な役割を果たしていると思われます。

私が訪問したすべての学校では、探究学習という教授法が採用されていました。これは、生徒の好奇心を育むことに役立っています。私たちの生徒は探究心を持って成長しなければなりません。彼らは、遭遇するものすべてについて探究できなければなりません。

教師として、知識は静的ではないため、最新の情報を入手する必要があります。知識は時々変化するため、教師を最新の情報にするには授業研究が重要で

す。探究法を養うためにも、授業研究は最適な方法です。教師同士が会えば、知識を交換し、態度を変えることができるからです。



## 院生自己紹介

### 学校改革マネジメントコース1年/福井県立若狭東高等学校

#### 細川 和孝 (ほそかわ かずたか)

今年度から学校改革マネジメントコースで皆様と一緒に学ばせていただくことになりました細川和孝と申します。現在、福井県立若狭東高等学校で工業科(電気・機械科)の主任をしております。本校は工業・農業・商業の3学科からなる総合産業高校であり、工業は電子機械コースと電気コースに分かれています。

私はこれまで、工業の教員として「地元福井の産業」、「ものづくり日本」を支え発展させる人材の育成をするという使命感をもって、20年以上工業教育に取り組んできました。その間、担任を14年、学年主任を3年、電子機械コース主任を5年務め、その中で関わった多くの卒業生が地元企業に就職し、県内地域の産業を支えてくれています。また、トヨタ自動車や京セラなど県外大手企業に就職し、日本の産業を支えている卒業生も多数います。これまで、そのような生徒達に企業が求める人材を育てるためのカリキュラムを考え、授業研究、進路支援、生徒支援、資格取得支援などに取り組んできました。先日、インターンシップで地元企業にご挨拶に回った際、製造業やディーラー各社で、「卒業生が頑張ってくれている」とのお言葉をいただいたり、卒業生が「先生お久しぶりです」と一人前になって活躍している姿を見せてくれたりと、これまでの教育が実を結んでいるなど感じ、とても嬉しい気持ちになりました。

しかしながら、近年全国的に工業教育離れが進んでおり、本校工業科においても定員を割り、その流れが押し寄せています。このまま産業教育離れが進めば福井県や若狭地域の産業に人手不足、人材不足が生じ、嶺南地域が衰退していく恐れがあることを危惧しています。また、少子化が進む中で地元子どもたちが残らなければ、ますます福井県が厳しい状況になると予想されます。

そんな中、これから新しい時代を迎えるにあたり工業教育や総合産業高校の魅力を高め、中学生に理解し選んでもらうためには何が必要なのか、カリキュラムをどう変えればよいかを考えるために、教職大学院でカリキュラム開発について研究することを決めました。

研究テーマを「探究を中心に据えたカリキュラム開発」とし、同時に学校全体の組織改革も必要であると感じていたことから、マネジメントコースでの学びを生かし、本校の魅力を高めるための組織改革、コミュニティづくりをする中で、希望ある未来が描ける産業教育に結び付けたいと考えています。

これまでの4、5、6月のカンファレンスやラウンドテーブルで、すでに多くの学びを得ています。多様な先生方と語り合うなかで「学びが楽しい」と感じるが増えてきました。その背景には教職大学院での対話に「心理的安全性」があり、同じベクトルの集団であるからだと思います。そして、今後も自らが主体的・対話的に学び、仲間と協働しながらコミュニティを広げていくことで組織を改革し、子どもたちの豊かな学びと成長へとつなげていきたいと思っています。よろしくお祈りします。

## 学校改革マネジメントコース1年（2年履修）/敦賀市教育委員会

## 指導主事 松永 敬子（まつなが けいこ）

教職大学院での研究や自己研鑽は、自分にはハードルが高く縁のないものと思っていました。そのため、昨年度、管理職から勧められた時は、驚きと戸惑いしかありませんでしたが、理論を学び直し、現場での実践につなげられる価値のある時間になると思い、入学を決意しました。それなのに、4月から想像もしていなかった場所での勤務となり、不安と戸惑いが再燃した中で、開講式、4月月間カンファレンスを迎えました。しかし、同じグループの先生方と話していく中で、前向きな気持ちが芽生えていく変化を感じました。（が、どんなことを研究していけばよいのかという戸惑いは拭えません・・・）

自己紹介にあたり、私の人生の中での学校や教師について振り返ってみます。

小学校入学時、同級生がわずか2名の複式学級で学んだ私にとって、先生方はすごく身近な存在でした。授業中には裏山へ探検に出かけたり、怪我をして迷い込んだ狸を飼育小屋で世話をしたり、校庭裏にあった先生方の寄宿舎にみんなで訪ねていったり・・・。小学校の運動会や発表会は地域の一大イベントであり、たくさんの大人達と賑やかな時間を過ごしました。中学校で初めて英語に触れ、外国人と流暢に話す英語の先生を目にし、初めて外国人と話すことができた経験は、私の生き方に大きな影響を与えました。以来、英語に夢中になり、時間があれば「ネイティブのように読みたい」と音読練習を繰り返しました。当時の校長先生は英語が専門で、校長室で教科書の暗唱をチェックしてくださいました。これも小規模学校ならではの良さで、英語が得意になった要因だったと感謝しています。私が過ごした小中学校はもう存在しませんが、心の中に確固たる存在として残り続けています。「尊敬される教師になって欲しい」と両親に名付けられた私は、その後、親への反発や他にやりたいことがあって教育学部には進まず、民間企業で働くことを選択しましたが、教師になる夢をあきらめなくて良かったと今は思っています。

教員生活で大きな転機となったのは、採用8年目からの3年間、タイのバンコク日本人学校に派遣されたことです。当時のバンコク日本人学校は、小・中学部合わせて約3000人の児童生徒が在籍する、世界で一番大きな日本人学校でした。在外教育施設派遣教員は、派遣される国を自分で選ぶことはできません。面接でその覚悟を問われた時は不安が沸き起こりました。私は、日本企業も多く進出している国での勤務となり、想像していたよりも快適に過ごすことができました。それでも、政治的な緊張が高まり外出禁止令が発出されたこと、暴動で休校となり住まいから黒煙が上がっているのを見ていたこと、自然災害の長期化で1か月以上の休校を余儀なくされたことなどから、日頃から不測の事態に備えることや組織的に冷静に対処することの大切さを痛感しました。派遣前の私は、部活動指導への努力により生徒や保護者からの信頼を得ていたように思います。部活動がない日本人学校では周りからの信頼を得るために「授業が勝負！」を強く意識し、教材研究に励みました。150名以上の教員が勤務していた学校のため、毎週のように授業研究会が自主的に開かれており、1年間研究主任として関わったことで多くの学びがありました。全国から集まった先生方の、小学1年生から中学3年生までの授業をいつでも見て学べる環境は、とても贅沢なものでした。同じ志を持つ先生方と異国の地で作り上げたコミュニティーは、私の心の支えの一つで、今でも交流が続いています。

この教職大学院で出会い、共に学ぶ先生方や学生の皆様とも、日本人学校での学び同様、刺激し合いながら、強固な絆を結んでいくことを願っています。日々の業務と家事・育児に追われている私にとって、教職大学院の学びはとても貴重です。支えてもらっている周りの先生方や同僚、そして家族に感謝し、有意義な2年間にしていきたいです。どうぞよろしくお願ひします。

## 学校改革マネジメントコース1年（2年履修）/越前市武生第六中学校

## 中屋 安智（なかや やすとも）

勤務地である越前市が私の生まれ故郷であり、現在も地元で家族と生活を送っています。これまで仕事以外は、割と悠々自適に毎日を過ごしていたような気がします。しかし40歳を過ぎると、地域の色々な役が回ってくるようになりました。現在は、町内の壮年会会長として、花壇の整備をしたり、夏祭りや秋祭りの夜店運営の準備をしたりしています。また、地区スポーツ協会の代表として、コロナ明けに久しぶりに開催される地区体育祭に向けて、選手集めだけでなく協賛金集めにも注力しています。その他にも、自治振興会での防災活動や植栽活動、自警消防隊での年末警戒も実施します。昨年度は地元神社の宮守として、境内の草刈りや祭礼の準備運営等も行ってきました。我が子が小学校を卒業してからも、町内を盛り上げようという一心で、子ども会の資源回収に軽トラを出して協力したり、壮年会と子ども会のイベントをコラボさせたりしてきました。もともと無趣味だった私ですが、10年ほど前から健康のために始めたジョギングをきっかけに、子どもと市民マラソンにファミリーの部で出場するようになりました。最初は楽しむことを目的としていましたが、回数を重ねる度に結果を欲張るようになってしまい、子どもに愛想を尽かされたことは、今でも反省しています。子どもが高学年になり、ファミリーで出場できなくなってからは、いよいよ自分の力を試そうと思い、10kmやハーフマラソンに挑戦しました。毎週休日に走り込んでいたので、普通に走り切ることができました。この調子でフルマラソンもいけるぞと、初めて挑んだ県外の大会では不甲斐ない結果で終わってしまいました。今思えば、決して十分とは言えない練習で結果が出なくて良かったです。それから約5ヶ月間、平日の夜にも練習するようになりました。仕事終わりは疲れているからと、今まで避けていた平日練習に取り組むことで、体力的にも精神的にも強くな

れたような気がします。そして今年、念願の第1回ふくい桜マラソンに友人たちと一緒に出場しました。何度も30km走を練習してきたことで自信が付き、想定以上の納得の走りができました。ゴールしたときは感極まり、涙が出ました。努力を続けてきたことが報われることが、こんなにも嬉しく、達成感があるのだということに久しぶりに味わうことができました。現在は、来年の第2回大会に向けて、一段階上げた目標を設定して練習に取り組んでいます。余談ですが、越前市で秋に開催される「たけふ菊人形」に合わせて、毎年関西から歌劇団がやってきます。それを家族と一緒に観劇することが至福の時間です。約1ヶ月という期間、何度も足を運びます。1日に2回観ることもあります。劇団員の豊かな表情や澄んだ歌声、情熱溢れる踊りを目の当たりにすると、生きる力が湧いてくるものです。今年は誰が来るのかと、今からわくわくしています。

40歳を超えてからこんなにも多くの経験を経験することになるとは、30歳の頃の私は想像もしていませんでした。しかし、これらの経験で身に付けた知見は、何らかの形で職場や生徒達に還元できると信じています。現在、生徒指導主事として子どもたちと日々向き合っています。VUCAの時代に活躍できる社会人を育てるために、多様な考え方やスキルを身に付けるべく、知的機能だけでなく、情意機能を十分に伸ばしてほしいし、その為に様々なことに挑戦し、成功体験や失敗体験を繰り返してほしいと思っています。彼らが卒業後も輝かしい人生を送れるようにするための支援者でありたいと常に考えています。



## 学校改革マネジメントコース1年/福井市松本小学校

## 小林 千恵美 (こばやし ちえみ)

趣味はお菓子づくりとラーメン食べ歩きです。シフォンケーキ作りが十八番で、今流行りのキッチンカー販売が退職後の夢です。こんな私が大学院に入学した理由や今後の抱負を自己紹介として述べたいと思います。

現在の教員不足がウソのような30年前。講師経験も長かった私が、ようやく正式に採用されたのは、子供を産んでからでした。「子供と真摯に向き合うためには正式に採用されて担任として関わりたい。」

「保護者ともよりよい信頼関係を築き、共に成長を喜びたい。」そんな一心で学級担任として走り続け、20年が経ちました。しかし、現任校では教科担任を任せられ、担任を離れることになりました。初めて担任を離れ、立ち止まって考える機会も多くなりました。これから先教育という重責を果たせるのか？何をすべきなのか？何がしたいのか？教員を続けていいのか？と自問自答する日々、辞めるという選択肢も幾度となく頭をよぎる日々を過ごしていました。

そんな中、自分が目指すものは「幸せな学校づくり」だという思いに至りました。さらに、隣に座っている少壮気鋭の新採用の先生が、この先も幸せに働ける学校になりますようにと願いました。実際、職員室はとても雰囲気の良い場所ではありましたが、日々「忙しい。」という台詞が聞こえてきました。なぜ先生たちは疲弊するのだろうか。子供たちも幸せを感じて日々過ごせているのだろうか。これらを課題と捉え、子供たちや先生方との関わり方を探りましたが、自分1人では解決できない課題、学校教育の範疇を越える課題もたくさんありました。

そこで、課題に向き合う場を大学院にも求めることにしました。大学の先生方はもちろん、同じ現場の先生、立場の違う先生、学生さんなど、いろいろな視点からの示唆がいただけると思ったからです。教職大学院は、語りで自己省察をして学びを深める場です。そこで自分がつきたい力は「対話力」です。まず相手の文脈に入り込むために傾聴力をつけることが

大切です。以前「先生は話を聞いてくれない。」と子供に言われたことが今でも心に刺さっています。聞いているつもりでも、そう捉えられていない……。自分が変わらなければと思いながら、なかなか変えられなかったことを思い出します。そして、思いを受け取った上で伝えたいことを返す。これもなかなか難しいことです。言葉選び、表現力が問われます。状況や相手によっても変えなければならないと痛感します。日々行う授業もこのやりとりで成り立ちます。つまり、対話力を磨くことが、子供や職場の同僚、保護者との信頼関係を築くことにつながると思い、入学を決意しました。

4月から新メンバーでスタートし3ヶ月が経ちますが、学校組織として日々進化していると感じます。子供たち一人一人にあたたかい風が吹く学校。あこがれられる高学年をお手本に下級生が育っていく風土。それが継承される学校文化。スクールプランの教育目標を最上位に掲げ、それに向かって日々子供たちの成長を見取る研究。どれもこれも、新校長から実践を通して学べることに感謝しています。そして、的確で迅速、そしてバイタリティーあふれる校長先生の推進力に、私もパワーをいただいています。今までは後ろ向きになっていた「学校改革」という大きな事業にも、今は立ち向かえる気がします。これからも自分にできることやすべきことを考え続け、メンバーの1人として、石を投げ続けたいと思っています。

私は小学校時代を全校児童25人の複式学級の学校で過ごしました。中学校時代は1学年120人規模になり、交友関係も広がりました。学年120人での合唱経験は音楽教師としての原点です。今思い返すと、常に人との出会いにわくわくし、つながりに感謝してきた自分がいます。この大学院でも、人との新たなつながりを大切にしながら学んでいきたいと思えます。皆様、こんな私ですが、どうぞよろしくお願ひします。

## 学校改革マネジメントコース1年/福井市社北小学校

### 松並 千尋 (まつなみ ちひろ)

今年度入学しました、学校改革マネジメントコース1年の松並千尋と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は現在、福井市社北小学校で、研究主任として校内研究の推進に携わっています。昨年度、貴学の教員研修高度化推進支援事業に参加し、他校の先生方との対話を通して、多くのことを学ばせていただきました。また、校内研究は、校内の先生たちの同僚性を高めることによって推し進められることを実感しました。

福井県の教員として採用されてから15年が経過しました。振り返ってみると、指導力も人柄も素晴らしい先生方に支えられながら過ごせたことが私の財産であると感じています。授業に対しての考えを先輩の先生から聞かせてもらったり、授業を見せてもらったりしたことで、多くのことを学び取ることができました。また、一人の社会人として、周りの人に迷惑をかけないように、どのように自分の仕事をこなしていくとよいか教えてもらったことで、現在の私の仕事に対する姿勢が形づくられたと思います。個人的な話になりますが、長男の出産に対しても大変支えてもらいました。先輩の先生に、なぜこんなに助けてくれるのか問うと、「自分の出産のときにも助けてもらったから、これから先、同じような人がいたら、支えたいと思っていた」と返ってきました。

互いに支え合う職場にいられたことで、自分の居場所ができ、教員としての仕事に励んでこられたと考えています。共に学び支え合う「同僚」としての認識を先生たちがもつことで、一人ひとりの良さを発揮でき、働きやすい職場になると思います。同僚性の高い学校組織にするためには、自分がどのように学

校運営に参画していけばよいか考えたいと思い、教職大学院で学ぶことを決めました。

そのために、現在、研究主任として取り組んでいるのは、先生一人ひとりの探究的な学び「一人一研究」と、授業を見合い、授業づくりについて語り合う「ふらっと参観」です。

「一人一研究」では、同じ研究テーマを設定している先生同士でサポートチームをつくり、定期的なカンファレンスを通して、自分の実践を報告するようしています。先生たちが目的をもち、一年を見通して授業づくりに取り組むことができることを目指しています。また、サポートチームでのカンファレンスを通して、先生たちがお互いの授業づくりを支え合うことを目指しています。

「ふらっと参観」では、先生たちがお互いの授業を見合います。参観者が、学んでいる子供たちを見取り、事後研究会でその姿について語り合うことで、目の前にいる子供たちに、今後どのような授業をすればよいかを授業者に考えてもらうことを目指しています。また、参観者は、子供たちを見取る力がつき、自身の授業づくりに繋げられるようになることを目指しています。「ふらっと」の名の通り、参観時間を選んでフラッと参観でき、授業研究会では、フラットな対話を目指しています。まだまだ課題はありますが、校内研究の面から、先生たちが支え学び合う関係づくりを目指しています。

校内研究に携わり、教職大学院で先生方と語り合うことで、学級経営にも新たな視点をもつことができました。教職大学院で学ぶ2年間で、自身の実践について、深く捉え直したいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

## 学校改革マネジメントコース1年/福井市社北小学校

## 伊澤 英美 (いざわ えみ)

私が連合教職大学院で学ぶ機会を得たのは、昨年末の教員研修高度化支援の特別カンファレンスに参加したことがきっかけだったと思います。そのあとに校長から教職大学院について声をかけてもらい、すぐに「面白そう。やってみたい。」と感じました。不思議なほど迷わず、翌日にはチャレンジしてみたいと返事をしたことを思い出します。「わくわく」が自分の原動力なのだと改めて自覚しました。

私は、正式に採用されるまでは時間がかかり、長い間講師を経験しましたが、そのおかげで、多くの学校や先生方、子供たち、地域やたくさんの方々との出会いに恵まれました。また、講師という立場だったからこそ、様々なことを教えてくださる方がたくさんいて、その日々によって今の自分の土台がつけられたと考えています。長い学びの期間を与えてもらったのだと捉えています。

これまで、学級担任として、子供たちと毎日深くかわり合い、共に成長していけることに喜びとやりがいを感じながら過ごしてきました。昨年度からは教務主任となり、管理職の近くで学校全体を俯瞰的に見た意見を聞く機会が増えました。これまでとは違い、学校全体の運営や安心して働ける環境づくりを意識するようになり、学級や学年経営だけに留

まらない視野の広さが必要であることを実感しました。教務主任として、教職員全体の働く環境について考えるとともに、共に学び合い、安心して協働できる職場づくりに向け、自分には何ができるのかを考え始めました。6年生の学級担任との兼務によって、学校運営の視点と授業づくりや学級経営の視点との多方面から考えられる環境にあることも恵まれていると感じています。

今年度、教職大学院でたくさんの方と対話することによって、自分の感じている漠然としたもやもやや課題が少しずつ焦点化されていくように感じています。もともとおしゃべりな自分は、人の話を聞くことも、話し合うことも大好きで、様々な考えを取り入れて、自分の考えが広がったり深まったりすることを大変楽しく感じています。また、学校で行っている個人研究のテーマを「自分の意思をもち、対話を通して考えを深める授業づくり」としています。自分自身と子供たちの学びが相似形であるよう、実践と省察を繰り返しながら進めていきたいと考えています。

教職大学院で学ぶ理論と実践を往還させ、語り合いながら得た自分自身の学びを子供たちや学校に還元したいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

## 学校改革マネジメントコース1年(2年履修)/小浜市立小浜中学校

## 泉 浩 (いずみ ひろし)

「本当にきれいだなあ」暮れゆく夕日が若狭湾を赤く染め、絵画のような景色が広がります。

4月に本校に異動してきて、慌ただしく過ごす私を、きれいな景色が癒やしてくれます。

夕焼けと海。ドラマだと様々な思い出が生まれる場所ですが、負けず劣らずカンファレンスもまた、私に様々なことを思い出させてくれます。これまでの経験が価値あるものとして再認識されることは、得も言われぬ喜びをもたらしてくれます。カンファレ

ンスを通して、今の私を創ってきたものが明確になりました。それは「人との出会い」です。

私は大学卒業後、京都市で教職人生をスタートしました。そこでは、超一流の先輩との出会いがありました。誰よりも授業を大切に、毎日情熱を注ぐ先輩の姿。これほど研究に打ち込めるのだ、と驚いてばかりでした。

また別の先輩は、大文字駅伝という大きな大会に向けての練習指導において、通常、小6担任が行って

いたところを「あなたに関わった方が、子どものためになる」と、中高陸上部であっただけの未熟な私に委ねていただきました。

他にも、学校の思いを家庭に伝えるだけの学級通信ではなく、子どもと保護者の方とのつながりが生まれるように通信に工夫を凝らす先輩から、家庭教育の大切さを教えてもらいました。数年ではありましたが、先輩との出会いが、今の私の土台を創っています。

その後、福井に戻ってきた私は、いくつかの地域で多くの生徒や保護者の方、先生方に出会い、10年程前に小浜市に戻ってきました。そこで出会ったのは、私が子どものときに学ばせてもらった先生方でした。時を経て、教員という同じ立場で働くことになったのです。

その先輩方は、私に新たな授業観を与えてくださいました。また、私が全力を注いだ教育実践を発展さ

せ、新しい世界を見せてくださる先輩もおられました。「小浜に戻ってきた良かった」と心底思ったのを覚えています。

小学校畑であった私は、その後中学校に異動しました。そこでは、生き方を模索する思春期ならではの生徒の心の内を知りました。素直に、純粋に思いを表出させる生徒がいる。そして、その生徒を支え、生き方を熱く語る教師がたくさんいる。何度も胸が熱くなって、ついつい夜の飲み会も増えた時期でもあります。刺激的な毎日でした。

そして4月から、新たな大学院での学びによって皆さんと出会うことができました。大切にしていきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

機会があれば、ぜひ小浜にいらしてください。食べ物 genuinely 美味しいですよ。もちろん、きれいな夕焼けは必見です。そして何より、教育に熱い人がたくさんいる最高の場所です。

## 学校マネジメントコース1年/勝山市教育委員会こども課

### 木下 恵美 (きのした めぐみ)

今年度より福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースで学ばせていただいております木下恵美と申します。どうぞよろしくお願い致します。私は、勝山市立保育園勤務を経て、現在は勝山市教育委員会こども課に勤務しております。

勝山市の公立保育園2園は少子化が進み、令和5年度末に閉園することが決まっていました。最後の1年も保育園で勤務し、閉園のために子どもたちと一緒に思い出を作ろうと思っていたところ、令和5年4月に勝山市教育委員会に異動になりました。突然の異動と4月から子どもたちの楽しそうな声が聞こえない環境で働くことに戸惑いや不安そして寂しさを感じましたが、そんなことも思っていられないくらい、忙しく慣れない業務に追われる日々でした。

私の業務内容は主に幼小連携ですが、他にも気がかり児の支援方法を学ぶための巡回相談をはじめ、公開保育や幼児教育・保育を検討する幼児教育推進委員会園長部会、5歳児交流保育や就学前の情報交換のための保育士部会、市国際交流員の国際交流活動

のための連携、市町幼児教育アドバイザーの会の運営、保育士の質の向上のための研修企画など多岐にわたっています。

保育現場しか知らなかった私が、この仕事に就いたことで、今まで出会わなかった方々と出会い、新しいことに挑戦する楽しさを感じるようになりました。それは、やらなくては！という思いとワクワクした気持ちがあったからかもしれません。しかし、2年後には公立幼稚園もなくなり市内には私立保育園やこども園が9園となり、この状況下で私立保育園・こども園への指導やコーディネートを行いながら市のすべてのこどもに対し、より充実した教育・保育環境を提供する役割を担うことになり、大きなプレッシャーを抱え、どうしたら良いのかととても悩みました。

そんな時に福井大学連合教職大学院の岸野麻衣先生に相談することができ、福井大学連合教職大学院を紹介していただきました。仕事をしながら学べること、現場の課題をそのまま大学の教員と考え、改善

に向けて取り組んでいけることを教えていただきました。不安はあるものの、何かしなくてはいけないと思っていた私は、すぐに福井大学連合教職員大学院に進むことを決断しました。

教職大学院では、校種や職種が違う多くの方々と対話する時間が多くあり、最初は自分の実践や考えを語ることに自信もなく不安なままスタートしました。今では、自分のつたない話も温かく受け入れてくれる安心感がとても心地よく感じています。また、

様々な方々の実践や考えを聴き対話することは、大きな学びでもあり支えとなっています。

この3カ月で私の考えも日々、変わってきています。「私ができることは何か？」自分に問いかけながら、何かできることを1歩1歩考えていきたいと思っています。この教職大学院で学べることに感謝し、出会う方々と過ごす時間を大切に過ごしていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

## 学校改革マネジメントコース1年（2年履修）/福井大学教育学部附属幼稚園

### 幼稚園教諭 澁谷 喜代子（しぶたに きよこ）

今年度、学校改革マネジメントコースに入学いたしました、澁谷喜代子と申します。4月より福井大学教育学部附属幼稚園配属となり、4歳児クラスの担任をしています。4月以前は、福井県の最西端高浜町の公立保育所・こども園で、保育士・保育教諭として勤めてきました。

高浜町では、2015年に子どもの主体性を考え、保育実践の見直しが図られました。保育実践研究グループ『ぴっか』が発足し「子どもたちが自分から学ぼう、遊ぼうとする力を育てる」を研究テーマとし、メンバーが中心となり研究が進められてきました。公開保育の実施、環境設定の見直し、事例作成、事例検討会の実施などの取り組みが企画提案され、それを受けて全体的な取り組みとして、全保育者が実践を重ね、それが徐々に定着していきました。しかし、それぞれは一生懸命に実践しているものの、そこに向かう個々の意識には差を感じるころです。私自身も、研究の必要性は理解するものの、取り組みはすべて受け身であり、積極性はほとんどなかったように思います。子どもの主体性を探り始まったこの研究には、職員自身の主体性も大事にしていきたいところですが、頭では分かっているながらも、いまひとつ積極性に欠ける背景の一つには、日々の忙しさがあるのではと考えます。保育の現場は、遊びだけではない生活部分、行事、保護者対応（支援）、事務作業など、こなしていかなければならないことがたくさんあり、

実践研究についての事前の計画、その後の省察のための時間をどう作っていくかは課題となるころです。こういった課題が挙がるのはどの現場でも同じなのかなとも思っています。

高浜町の取り組みには、講師・助言者として福井大学教職大学院の岸野麻衣教授に深く携わっていただいています。岸野先生との繋がりにより、教職大学院入学・附属幼稚園勤務という大きな学びの機会を作っていただきました。これまでに高浜町から2名の職員が順次2年間ずつ務めてきて、私は3人目となります。先の2名はミドルリーダー養成コースにて、率先力としての力をつけ、確かな学びの道として固めていってくれました。私は少々立場が違い、学校改革マネジメントコースへの入学となったわけですが、先にも述べたように、自分には積極性はありません。みんなの取り組みになんとなくついていくことしかできていない私が、この大学院入学や附属幼稚園勤務に自ら手をあげる訳もありません。自分に声がかかった時には、そんな意欲は持ち合わせていない、自分なんて恐れ多いと断ることしか頭にありませんでした。しかし、前任2人の思い、また保育実践研究グループ『ぴっか』の思いを考えると、この道を閉ざすわけにはいかない、こんな私に声がかかるのも意味があつてのこと、私にも何か出来ることはあるのではないかと、半ば使命感のようなものでここに居合わせているというような状態です。

さて、環境が変わり、いろんなことに戸惑い不安だったスタート。まず、附属幼稚園は研究園なだけあって、日々の忙しさの中にも、研究に向かう土台がしっかりしており、みなさんの意識の高さに思わず尻込みしてしまいました。園内研究会での職員の語り合いでは、子どもの見取りがしっかりなされ、学びについて深く追究されていました。なにより、職員同士が互いを認め合うやり取りが多く、なんて素敵な空気感なんだろうと感動を覚えました。こういう部分を高浜町に持って帰れたら…と初端から感じた次第です。

教職大学院では、語り上手な方が多い中で、口下手な私はしんどさを感じていました。しかし、それを今さら隠せることでもありません。多種多様な分野の方々とのグループセッションでは、考えがまとまらない中でも、自分でも何を言っているのかわからない状態でも、恥ずかしながらそのままをさらけ出しています。4月のカンファレンスで「私はまず自身の意識改革をしなきゃならない」ということを語った

わけですが、その時には「そう思っている時点で意識改革できているよ」と言ってもらえ、すでに1歩踏み出せていることに気づかせてもらい、勇気づけられました。様々な方の語りを聴き、自分の考えを問い直したり、新たな気づきをもらったり、また、自分も語ることで思いが定まってきたりなど、聴き語っていくことの醍醐味をこの数か月で実感しているところです。

学校改革マネジメントコースとなると、プレッシャーも感じています。自身のことはもとより、組織のマネジメントなんて、そこまでの考えがなかなか及びません。しかし、先に挙げたように課題はそれなりに感じています。その課題を自分事としてしっかりと向き合い、考え、行動していける器量を身につけていきたいと考えます。

今この恵まれた環境の中で学ばせてもらえることに感謝しつつ、視野を広げ、感覚を磨いていき、自身の成長に期待もしながら、しっかりと2年間努めていきたいと思えます。よろしくお願ひいたします。

## 学校改革マネジメントコース 1年/高浜町立内浦中学校

### 本田 順郁 (ほんだ なおふみ)

今年度から福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースで学んでいる本田順郁と申します。

私のこれまでの教員人生は、地元中学校の社会科教員からはじまり、2～4年ごとに小、中学校を異動した後、町行政職（3年）をはさみ、また中学校、町外の小学校、そして町内の中学校と短期の定期異動を繰り返しました。ここで少し落ち着けるのかと思いきや、新たな中学校も1年間の在籍で今度は教育行政職（4年）に異動。それを経て、現任校の2年目を迎えています。このように、ひとところに留まることなく、慣れてきた頃に次の場に移るといったような教員人生を送ってきました。

これらの日々の中で、多くの素晴らしい先生方や地域の方々とお会いしたこと、様々な役割（社会科教員、小中学級担任、部活動顧問、人権教育担当、道徳教育担当、生徒指導担当、研究主任、町人権教育担当、指導主事など）をさせて頂く中で、多様な視点を得られ

たことは、大変ありがたいことだと感じています。また、度々異質な世界の新参者になる機会を得ることで、その時々自分の身の丈や限界を知るとともに、周りの助けを得るすべも少々身に着けることができたと思っています。

今回の福井大学教職大学院で学ぶことに関して、前校長からお話をいただいた当初はお断りしましたが、再度お声かけ頂いた時は、教職大学院というこれまでと違った場で、また新たな視点を獲得できると思い直し、学ばせて頂くことにしました。

現在取り組んでいることは、研究主任として、校内の教員の同僚性を高め、それとともに個々の教員の資質能力が高まる研修の計画と実施・運営です。その目的を達成するために、どのような概念や視点を共通理解し、どのようなキーワードを共有すればよいのかなど、研修の土台作りを行うとともに、どのような形式の研修をどう組み合わせっていくか、また、どの

タイミングで行えば効果的なのかというスキル面の向上を模索しています。

そして、共通理解できた事柄や取組が児童生徒への学習指導や生徒指導、学校全体の活動にも浸透すればよいと考え、生徒指導担当や人権教育担当との連携に取り組んでいます。

今回縁があって、多くの方々との出会いと、新しい視点を学ぶ機会を頂いたことに感謝しつつ、自らの新たな一面が引き出されることを楽しみにしています。よろしくお願ひします。

## 学校改革マネジメントコース1年（2年履修）/福井県立科学技術高等学校

### 前川 博靖（まえがわ ひろやす）

今年度より、連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学した前川博靖です。よろしくお願ひします。現在は、福井県立科学技術高等学校に勤務し、2年生の担任をしながら数学科教員として日々を過ごしています。

少し私自身の教員としての歩みを振り返ります。高校教員として採用されてから10年間は、教科指導や部活動指導が中心でした。10経年を迎える節目のタイミングで、2年間の一般行政派遣（知事部局産業労働部商業振興・金融課）を経験しました。そこでは、「商業振興」や「地域活性化」の施策づくりや事業を担当する機会があり、「若者の地域離れ」について考え直すきっかけを与えてもらいました。また、自分たちの行動で福井県をPRしようとする熱意ある事業者の方々との出会いがとても刺激的で、教職現場に戻った際に、地域のことを大切に想ってくれる生徒を育てたいと考えるようになりました。そのような思いを持って復帰した現場では、総合的な学習の時間のカリキュラムづくりに挑戦しました。ただ、同じような学習活動を中学校でも経験していることから、中高での総合的な学習の時間を系統立てて学ぶことや、より地域との活動が多い小学校と連携することができれば、これらの学習がより深まるのではない

かと考えるようになり、小・中・高を繋ぐ系統的な指導の在り方を探りたいという新たな課題に向かって、小学校へと指導する環境をうつしました。小学校では、数学が専門の私にとって、国語などの専門外の教科で評価をすることが一番の課題でした。何がどこまで達成できていけばよいのか、今回の授業では何を目的として授業をするのかなど、自分自身がきちんと理解しようと準備する習慣が身に付いたことで、教材研究の仕方にも幅ができたと思います。また、他の教科を専門とする教員同士が話し合いをする機会が多いため、幾つもの側面から教材研究をすることができました。高校よりも長い6年間の中で児童の成長を考えることにもふれ、系統性という言葉の大切さを再認識することに繋がりました。

私は、この連合教職大学院で、小中高一貫（連携）と言えるような学習指導や生徒指導の在り方を見つけ、それに取り組みたいと考えています。その根底には、地域を大切に想ってくれる生徒の育成を、その地元で行いたいという思いがあるからです。まだまだ手探りの段階ですが、このような機会を通して、たくさんの方々に出会えること、さまざまな課題に対してたくさん意見交換ができることを楽しみにしています。どうぞ、よろしくお願ひします。

## 学校改革マネジメントコース1年（2年履修）/岐阜市立市橋小学校

### 加藤 敦子（かとう あつこ）

これまで多くの方と出会い、多くのことを経験させていただきました。「巡り合わせ」は「偶然」ですが、どれも私の人生になくはならない「必然」だと思っています。今回、教職大学院で学ぶ機会を与えてくださったことも、ここでの出会いも、その1つと思って感謝し、励みたいと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

#### 1. 魅力は原動力 その1

「絵を描く仕事に就きたくて専門学校に行っています！バイトで絵を描く仕事もやらせてもらっています！」「途中で学校に行けなくなっちゃったけど、やっぱり卒業したかったから通信教育で勉強して、卒業しました！」「浪人は辛かったし、親にも苦勞をかけたけど、医者になりたいから頑張りました！」「小学生の頃は先生にいっぱい迷惑かけたけど、今はもう大丈夫やで！仕事も楽しくやっとなるで！」「卒業した時にももらったメッセージカードが私の部屋にずっと貼ってあって、受験の時に元氣をもらったよ！」…最近、教え子の成人式に出席させていただくことや、働いている教え子にばったり出会うことが増えました。自分の夢に向かい、楽しみながら歩んでいる子、苦勞をしながら自分の目指す道をゆっくり歩み続ける子、過去の自分を冷静に見つめて素直な気持ちを伝え、安心させてくれるまでに成長した子など、彼らの人生は実に様々でした。でも、どの子の表情からも、日々の充実感や満足感を確かに感じることができました。何年も経って、この仕事の新たな魅力と続ける意味に気付かせてもらいました。これは私自身を動かす1つ目の原動力です。

#### 2. 魅力は原動力 その2

現在の市橋小学校に勤務して5年目になります。毎年児童数は800名前後で、通常学級25学級、特別支援学級5学級、通級指導教室2学級の大規模校です。子供に関わる職員も多く、40～50名程おります。新規採用の教員は毎年2名ずつ入り、若手教員が比

較的多い学校です。若手の先生方の力で学校を活気あるものにしたと思います、4年前から「かがやき会」という若手教員（採用1～6年目までの教員、初めての小学校勤務の教員）の研修会を立ち上げて勉強会を始めました。困り感を共有して、よりよい指導法について話し合ったり、「分からないこと」が1つでも解消されるように、分からないだろうことを取り上げて通信にしたため、お渡ししたりしてきました。研究授業前には、一緒に教材研究をしたり、模擬授業に参加したりして、一緒に学ばせていただきました。そうすると「～ふうにやってみたら、子供たちが、…ふうに変わってきました！」とか、「研究授業で、子供たちが一生懸命頑張ってくれました！」など、実践してうまくいったことや成功体験などを嬉しそうに報告してくれました。先生方が笑顔で話す様子から、頑張りが子供たちに還元されたのだらうと思うと、これもまた仕事の魅力であり、やりがいと気付きました。これは私自身を動かす2つ目の原動力です。

#### 3. 新たな魅力を見出す

子供たちの明るい未来と若手教員の頑張りによる子供たちの明るい学校生活は、私を動かす原動力に間違いありません。しかし学校には、もっと自分を成長させたい、変わりたいなどの願いをもっている子供たちがたくさんいます。また、若手教員以外にも、資質・能力を高めたいと思ってみえる教員がいます。学級や学年経営、生徒指導などに悩んだり、学校業務に追われたりして疲弊してみえる教員もいます。このような学校の状況から、少しでも学校の役に立ちたいと以前より考えていました。そんな時、偶然にも教職大学院で学ぶ機会を与えてくださいました。今日までの約3か月半で、今まで考えもしなかったことが湧いてきました。これは、多くの方と語り合う実践コミュニティの場に出会えたからだと思うと、本当にありがたい限りです。ここでの学びを通して、私は教員という仕事の新たな魅力を見出します。



## 学校改革マネジメントコース1年/岐阜市立藍川中学校

### 教諭 伊藤 雄樹 (いとう ゆうき)

はじめまして。岐阜市立藍川中学校の伊藤雄樹(いとう ゆうき)と申します。

本年度より、連合教職開発研究科 学校改革マネジメントコースでお世話になります。

生まれも育ちも岐阜県です。職歴は、岐阜県内の美濃市の小学校に3年、養老町の中学校に3年、岐阜市の中学校に5年、養老町の小学校に3年、岐阜市の中学校に7年勤務した後、同じく岐阜市にある現在の中学校に勤務し、2年目となります。気が付くと、教職に就き、23年目となりました。

私が教師を志すようになったきっかけは、自分が生きた証が残せる仕事だと考えたからです。

建設業は、自分が作った建物、医者には治した患者などがそれにあたると思うのですが、「先生のあの言葉で頑張れた」という児童・生徒が一人でもいれば、自分が生きた証と感じ、やりがいを感じられると考えたことが教師を志したきっかけです。

私が大学院に入学しようと決めたきっかけは、段々と自分の経験に基づく予測のみを根拠として仕事をしている自分に、新しい知識を入れ、アップデートをしたいと考えようになったことです。

まだ入学させて頂いて3ヶ月ですが、研修観の転換や、テスト作成の現在など、目まぐるしい学校現場にいるだけでは知ることができない鮮度の高い情報に巡り合え、本当にうれしく思っております。

大学院では、「月残業時間45時間以内で取り組める最大限効果的な学校教育サービスの安定供給と仕事の効率化～効果・効率のリファイン(精製・洗練)を目指して～」をテーマとして、長期実践報告を作成していきたいと考えております。

学校現場には、職員として様々な年齢層、勤務形態の職員がいます。例えば、定期テストを作成し、その問題検討を行うだけでも、勤務時間内のお互いの空

き時間を調整して行うことが求められます。お互いの状況を理解・尊重し合いながら、よりよい教育サービスを児童・生徒に提供し続けることができる学校づくりを目指しています。

そのため、「学校のどの職員が担当しても、ある一定水準以上の教育サービスを提供できる仕組みづくり」をしたいと考えました。

ただし、これは、湯水のように時間を使い、教育サービスの質を高めていくものではありません。月の残業45時間以内という限られた時間の中で、最も効率的で効果的な教育サービスを提供できる学校づくりを目指して、その仕組みはどうあるべきかを研究テーマとして考えています。

そのために、何をこそ時間をかけるべきことなのか、また、どうすると効率的で効果の高い教育実践となっていくのかを考えております。

現在はその一つの取組例として、「藍川中学校版COCOLOプラン」を作成しました。

文部科学省が令和5年3月に「COCOLOプラン(誰一人取り残されない 学びの保証に向けた 不登校対策)」を通知しました。これを、担任一人でこれを考え、湯水のように時間を使うのではなく、「学校として何ができるのか」を考え、「教員誰でも・教室内外にいる生徒誰にでも対応可能な指導と評価の方法」として、「藍川中学校版 COCOLOプラン」を作成し、誰一人取り残されない学びの保障を、持続可能な形を考え、実践し始めました。

自分がこの大学院で学んだことが、学校現場で児童生徒にとっても、職員にとっても、限られた時間内で、最大限の効果を提供できる仕組みづくりになるように、皆様方と一緒に学ばせて頂ければと考えております。

どうぞよろしく願いいたします。

## 学校改革マネジメントコース1年(2年履修)/岐阜県羽島市立中央小学校

### 野倉 理志 (のくら さとし)

本年度より、福井大学教職大学院学校開発マネジメントコースにてお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。

大学院の内容については、以前から知っていたのですが、距離的なことや、果たして職務との両立ができるのかといった疑問が先行しており、今回入学することとなったことについても、4月当初は私自身がまだ受け入れられていない状況でした。

現在までに2回のカンファレンスと2回のラウンドテーブルに参加をさせていただきましたが、とても有意義な時間を過ごさせていただき感謝しております。

さて、私の職歴についてですが少しお話をさせていただきます。

#### 1 教職を選んだきっかけは鹿児島

私は大学時代を鹿児島県で過ごしました。その頃は現在のような異常気象もなく、南国と言われてはいましたが、湿度も低く日中は暑い日がありましたが、夜は涼しくエアコンも必要ないくらいの過ごしやすい気候でした。また現地の方々の穏やかな性格に助けられ、日々勉学に励むことができたことを覚えていています。

教育実習も、鹿児島県市立の公立中学校にて行いました。指導教諭が非常に厳しく研究授業のやり直しを指示され苦勞をしました。必死に指導案を作っていた時に、体育館の方から3年生の合唱練習の声が聞こえてきました。実習校が海辺にあったので、海を眺め、美しい声を聞いているときに「こんな歌がいつも聞ける仕事っていいな。こんな歌を教えられる先生になろう。」と思ったのが志望のきっかけでした。

#### 2 在外教育施設の経験が新たなステップへ

中堅の時期に差し掛かり、かねてより希望をしていた在外教育施設への勤務が決まり、中華人民共和国内の日本人学校にて職務にあたることとなりました。

そこでは、他県より派遣される教員と一緒に仕事をするわけですが、それぞれの県によって指導観や、方針が全く違い衝突する場面もありました。反面、学ぶことも多くあり、国際理解に関する知識や感覚を体験し、人間的にも教師としても学びの多い3年間を過ごさせていただきました。

#### 3 キャリアステージ後半に差し掛かり思うこと

孔子の名言に、「我十有五にして学に志す…」から始まる言葉があります。私自身が孔子の言うどの年齢に達しているのかは、まだまだ恥ずかしくて話せないくらいです。

自身のキャリアステージがすでに後半戦に入ってきていますが、最近特に思うのが「孔子のように常に勉学に励むことは人として大切ではないか。」ということや「孔子のように学んだことを後進の人に教えることも大切ではないか。」といったことです。

初任者時代は、定年まで担任をして子どもと接したいと感じていました。今は、現場で活躍する先生を育てたいと強く感じます。その時期に学校改革マネジメントコースへ入学できたことは、運命だったのではとも感じます。

もう一度、「学に志し」そして一気に孔子の言うところの「五十」辺りまで学ぶことができたらと思っております。大学院の2年間で自身の天命を知ることができるよう、勉学に励みたいです。

## 学校改革マネジメントコース1年/岐阜聖徳大学附属小学校

### 山田 亜都子 (やまだ あつこ)

はじめまして。今年度より、福井大学連合教職員大学学校改革マネジメントコースに入学しました、山田亜都子です。私は、勤務校の今ある課題に向き合いたい。恩返しをしたい。そんな思いで入学を決めました。

私は、小学生の頃からから大学を卒業するまでの間ずっと『学校』という場所が大好きで育ってきました。私と友達。私と先生。『学校』という場所で多くの人に出会い、楽しい時間を過ごしてきた経験が、今の私を支えています。中学生の時には【あんな先生になりたい】と思う恩師に出会いました。それ以降は、『先生になりたい』という一心で、高校そして、岐阜聖徳学園大学教育学部中等教育課程社会専攻へと進学しました。進学の際に悩んだときや、人生の岐路に立たされたときには、家族と同じように、いつも先生方や友達がいてくれました。だから、私は、先生や友達、たくさんの仲間がいる『学校』という場所が大好きなのだと思います。

しかし、多くの方に支えられ大学まで進学したにも関わらず、私は現役で教員採用試験に受かることができませんでした。それでも、教師としての夢を諦められず、教員採用試験の勉強をしながら、県内の公立小学校で一年間常勤講師として勤務をしていました。二度目の教員採用試験を目指すある日、卒業した大学の当時の就職課課長（元岐阜県小中学校校長会会長 松田孝弘先生）から「本学園の附属小学校に一つ枠が空く。採用試験を受けてみないか。」と電話をいただきました。教師になるチャンスだという思い

と、ご縁を感じながらの受験でした。この採用試験があることを知らなかったら、私は今、私立学校の教員にはなっていなかったかもしれません。

現在私が勤務する岐阜聖徳学園大学附属小学校は、岐阜市内唯一の私立の小学校です。岐阜聖徳学園大学の教育学部附属として設立され、現在は1学年2学級、全校児童数 362名の学校です。私が赴任した2005年（平成17年）は、教育学部のためにつくられた1学年1学級の小さな学校でした。しかし、入学希望者が増え、校舎が新設されると、教職員数も児童数も一気に増え、赴任した当時とは大きく様変わりしました。そんな中で徐々に浮かび上がっていった本校の課題。私立学校がゆえ、保護者の期待に応えようとするあまり、きちんとできないまま学校が大きくなってしまったこと。人との出会いや関わりが増えたにも関わらず、子ども達のことを語れなくなってしまった教職員間のつながり。決して仲が悪いということではありません。大好きなはずの『学校』を今、楽しく思えなくなっています。

人と人とのつながりの大切さや楽しさを、4月からの月間カンファレンスやラウンドテーブルで改めて強く感じています。この福井大学教職大学院では、学校課題を共有できる職員集団づくりを目指して、子ども達のために学んでいきたいと思っています。そして、私自身、大好きな【学校】を取り戻したいと思っています。

2年間、どうぞよろしく申し上げます。

## 学校改革マネジメントコース1年/埼玉県立松山女子高等学校

### 黒田 勇輝 (くろだ ゆうき)

今年度より学校改革マネジメントコース東京サテライトでお世話になっております、黒田勇輝と申します。以後お見知りおきを願います。

さて、私は一昨年度までの3年間、埼玉県の再編整備計画に基づき、普通科と農業科・工業科の高校の統合準備に校長として取り組んできました。その取組は、私が今までの職で経験し、学んだ学校組織マネジ

メントのノウハウの総仕上げともいうべきものでしたので、前任校での取組ですが、少々触れさせていただきます。

校長として着任した際のミッションは、伝統校同士の統合でした。また、普通科と農業科・工業科を併せ持つ高校は県内初ということもあり、困難度の高いミッションでもありました。同窓会をはじめとする様々なステークホルダーの強い思いも大切にしつつ、新学習指導要領の基本理念である「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」を実現すべく、そのミッションに取り組みました。

新校では、「地域との協働による学校づくり」を基本としました。複雑化・困難化した教育課題を抱え「予測困難な時代」と言われるこれからを生きる子供たちには課題解決能力が必要とされています。その教材として最適なのが地域社会を取り巻く様々な課題です。これからの学校は、この地域課題をカリキュラムに取り込んだ「課題解決型学習」を進めて行く必要があると考えました。その地域課題探究を「こだま学」と名付け、新校の教育活動の中心に据えました。

次に、この「こだま学」を持続可能なものとする取組として、それを支える協働的な組織、「地域探究支援コンソーシアム」に着手しました。その組織体制づくりには、学校運営協議会制度「コミュニティ・スクール」（以下「C・S」）を活用しました。普通科・農業科・工業科を併せ持つ新校が、より効果的に地域学を展開するためには、農業・工業関係者、自治体及び地域住民等からなるC・S委員を構成することが重要です。委員は、JA、地元農業従事者、商工会議所、地元工業団地、市役所企画財政課、市教育委員会、大学及びPTA等で構成することにしました。この「地域探究支援コンソーシアム」の支援の下、地域課題探究に取り組むことで、生徒たちは自分の力で人生や社会をよりよくできるという実感を持つことができ、変化の激しい社会において困難を乗り越え、未来に向けて進む希望や力を得ることができるのです。これこそが「主体的・対話的で深い学び」と「社会に

開かれた教育課程」が実現できる教育活動であると確信し、校長としてこのような新校開設準備の学校経営を行った次第です。

以上のような取組のベースには、これまでの職で培った経験と学びがありました。教育センターの指導主事を務めた際、管理職研修を担当し、管理職の在り方というものを直に学びました。また、県教委の主任管理主事を務めた際は、学校評価や人事評価のシステム構築・運用を担当し、学校組織マネジメントについての知見を深めることができました。C・Sもこのとき所掌しました。地域探究については、2度目の教育センター勤務の際、島根県教育センターとの連携協定締結の統括を務めたことで、地域探究のトップランナーである島根県の隠岐島前高校などの地域探究先進校とつながりを作ることができ、その経験が地域との協働による学校づくりに大いに役立ちました。これら全ての経験が、この3年間の学校づくりにはもれなく詰まっているのです。

今年度、埼玉県立松山女子高校に着任しました。令和7年度に創立百周年を迎える伝統校で、生徒は勉強に部活動に一所懸命取り組み、地域からもとても愛されており、前任校とはさまざま状況は異なりますが、やはり地域課題探究をベースにした学校づくりを進めていきたいと思っています。1学期も終了し、課題も見えてきました。現在、教職員との信頼関係を築くための学校マネジメントを少しずつ仕掛けていくところです。

現在、私が考える学校改革の具体策は、本校の地域課題探究のプランの作成と「地域探究支援コンソーシアム」の組織体制構築です。そして、その実現に向けた学校経営をいかに進めていくのかということを教育研究の課題としたいと思っています。今まで培った自身の経験をベースに、実践と理論の往還を行いながら、試行錯誤の学校改革マネジメントを進めていくつもりです。乗り越えなければならないハードルは様々ありますが、仲間と切磋琢磨し一つずつクリアして、着実に前進していきたいと思っています。みなさん、どうぞよろしくお願ひいたします。

## 学校改革マネジメントコース1年/奈良教育大学附属小学校

### 河田 慎太郎 (かわた しんたろう)

初めまして、今年度から福井大学連合教職大学院で学校改革マネジメントコースを履修するようになりました、河田慎太郎と申します。

小学校教員として28年目を迎えております。最初の14年間は私立大学である近畿大学の附属小学校で勤務いたしました。ここでは、小学校での学習内容でありながらも、かなり高度な問題をいかにしてわかりやすく説明するかについて、毎日教材研究に励みました。「先生が説明してくれたから、解けなかった問題が解けるようになりました」とニコニコと話しかけてくる子どもたちに、いつも元気をもらっていました。

次に勤務した学校は、奈良女子大学附属小学校です。100年以上の歴史と数多くの実践研究がなされている学校で、前任校と180度違い、教授法（先生が教え自分のものにした後で学びを深める）ではなく学習法（自ら学ぶことの見通しを持ち、自ら探究して検証する）についての研究をしました。自分で目標を定めて、一人で考えていく「独自学習」と、十分に自分の考えを創った後で友だちの考えを聞き合い「相互学習」との往還により、自ら学びを創っていくことを大切にする学校です。そのような子どもたちを育てるために、子どもを信じてどっしりと待つことや、指導が必要な場面を見極めて最小限の効果的な出ができるように学習展開を見取ることなどを大切にして学びに取り組んできました。

一昨年度、勤務校の設置期間である奈良女子大学と奈良教育大学が統合され奈良国立大学機構となりました。奈良女子大学と奈良教育大学は、それぞれ附属小学校を持っていますが、どちらの小学校も人事交流が少ないです。そこで、お互いの良いところを交

流できるように、本年度から奈良女子大学附属小学校と奈良教育大学附属小学校の間で人事交流が行われることになりました。どちらも奈良国立大学機構の附属小学校ですので人事交流といっても形式上は配置換え（部署が変わったようなもの）です。その初めての交流の役を担うこととなり、本年度は、奈良教育大学附属小学校の教員として勤務することとなりました。

学校改革という言い過ぎているように思いますが、今までの教員経験を生かし、新天地で子どもたちがより良く学んだり遊んだりするために、私にできることはないか考えていきたいと思います。教職大学院での話し合いの中で、やってみようと考えていることを話すことがあるのですが、今までの月間カンファレンスで、先生方からいただいたアドバイスが大変参考になっています。今まで勤務してきた学校との違いを検証したり奈良教育大学附属小学校の良さをたくさん学んだりして見識を深めていきたいと考えております。

今までは、授業実践や学級経営など担任としてのスキルアップを中心に考えて教師生活を送ってまいりました。50歳を超え、学校改革という目で学校を考え、今までお世話になった学校に恩返しをしたい気持ちで教職大学院に入学しました。カンファレンスを通して、一方的に話を聞くだけの研修にならないようにする工夫や、働き方改革のためにできることなどについて学び、子どもたちのための学校、先生方のための学校を作っていきたいと考えております。これから共に学ばせていただく先生方、福井大学をはじめ教職大学院でお世話になる先生方、どうぞよろしく願いいたします。

## 学校改革マネジメントコース1年/千代田区立麴町小学校

### 校長 田村 砂弥香 (たむら さやか)

今年度、東京サテライトにて学校改革マネジメントコースに入学した田村 砂弥香です。

私は、東京都練馬区で生まれ育ちました。母親が小学校の教員をしていてとても忙しかったため、学校の先生にはなるまいと思っていたのですが、中学生の頃、体調不良で保健室に行くことがよくあり、学校の中でも特別な場所である保健室に興味をもちました。教室では荒れている生徒も、保健室では素直な表情を見せ、保健の先生に思いを語っていたのです。

「病気だったら病院に行くし、悩みがあればカウンセリングに行く。でもそこまでいかないけれど元気ではない子がいる。保健室で癒されている子はたくさんいる。自分は、そういう子どもたちを支える仕事がしたい」と思い、養護教諭を志しました。

念願の養護教諭になってから、公立小学校3校で勤務しました。保健室での子どもたちとの関わりは、悩みも多いけれど楽しく充実した日々でした。「本来は、保健室に来る必要がないぐらい、子どもが自分で心身の健康を管理できるとよい。アフターケアばかりではいけない」と感じ、保健教育に力を入れるようになりました。授業を通して、保健室に来ない子どもたちとの関わりも深まりました。

やがて、「養護教諭の研修は、養護教諭経験のある指導主事が企画・運営した方がいいのでは」と考え、指導主事として東京都教育委員会に勤務することになりました。最初のうちは、新規採用養護教諭研修等を担当し、若手教員の人材育成にやりがいを感じました。その後、体育・健康教育に関する指導行政や議会対応、施策立案に関わることになり、気が付けば学校を離れて14年が経過していました。

昨年度、校長として久しぶりに学校に着任しました。学校を離れていた期間が長かったため、最初はまさしく浦島太郎のような心持ちでした。しかし、しばらくたつうちに、コロナ禍を経てICTの充実等の環境の変化はあっても、「学校は15年前と意外と変わっていない」と感じるが多くなりました。また、本校は私立中学校を受験するために塾に通う児童が

多く、「学校の授業は簡単すぎてつまらない」という発言が聞かれるのも気になりました。日常のストレスを学校で発散する児童もおり、教員は日々対応に追われていました。「学校の役割って何なんだろう」とあらためて問い直す日々でした。

学校は、受験科目ではない教科や特別活動も含めて、子どもたちが総合的に学びと経験を積んでいく場所です。多様な子どもたちが一堂に会し、日々関わり合いながら共に成長していく場所です。これからの時代を生きていく子どもたちには、正解のない問いに粘り強く向き合い、多様な他者と協働しながら最適解を考える力を身に付け、幸せを追求してほしい。困難に出くわしても決して諦めず、しなやかに生き延びる強さをもってほしい。そのためには、ルールを守り、静かに話を聞く学習規律ももちろん大切だけれど、子どもたちを主役として、学びそのものをもっと変えていく必要があるのではないかな…そんな思いが強くなりました。また、自分自身ももっと学ぶ必要があるということを感じました。そんな折、福井大学のラウンドテーブルに参加した副校長の紹介で、東京サテライトの福島昌子先生を訪ね、お話を伺って探究的な学びに深く共感しました。また、福井大学教職大学院では働きながら学べることを知り、ほぼ直感的にここで学ぼうと決めました。

実際に入学してみて、オンラインで講義を聴くような授業を想像していた私は、対話を中心としたカンファレンスのスタイルに驚きました。あまり自分語りをするものではないと思ってきましたが、今の自分を形作ってきたこれまでの経験をあらためて振り返りました。長く行政にいた自分にとって、教職大学院での学びはリスキリングでもあり、学校経営を探究するプロセスでもあります。ここに来なければ出会うことのなかった先生方や院生のみなさんと、立場や所属を超えてざっくばらんに対話することも大変貴重です。2年間、学ぶことを楽しんで、成長したいと思います。どうぞよろしくお祈りします。

## 学校改革マネジメントコース1年/横浜市立奈良小学校

## 営野 雅樹 (えいの まさき)

横浜市立奈良小学校で副校長をしております、営野 雅樹と申します。今年度から、教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました。

入学したきっかけは、仕事の先輩でもあり、かつて同じ職場で数年間ご一緒させていただいた尊敬する方からの声掛けによって、この大学院に興味をもったことです。

わたしは副校長としては、今年度4年目となりまして、2年目を終えたころから、同じ業務のルーティンに少し疲れてきていました。そして、このままでは惰性で過ごすことになってしまうのではないかと危機感を感じ始めていました。副校長は、学校での内部業務が多く、これまで参加してきた市の研究会にも思うように参加できなくなるうえ、教科研究からは遠のいていきます。また、校長ほどの責任はなく、役目的には校長の業務を補佐する立場でありながら、自ら学校経営の舵をとるわけではないため、何となく過ごせてしまい、物足りなさを感じていたのです。そんなときに、新たな学びの機会となりそうな大学院という道、さらには休職せずとも学べる仕組みに今の自分に合っているのではないかと期待をもちました。

学べる場を探していたのも事実でした。この立場になってからは、知人が開催する有志の会に積極的に参加し、経験年数の浅い方々に交わりながら、教科のことや学級経営に関する事など、語る場にも加わってきました。立場が違う、後輩から学べることも多くありました。ただ、対等の立場で語るのとは異なり、どうしてもご意見番のような立ち位置になってしまうため、そこでも物足りなさを感じておりました。

先述の先輩からは、「これまで自分が取り組んできたことを話せるし、省察をしていくことで新たなことに挑戦していくためのヒントになることもある」という話を聞き、新たな挑戦のつもりで入学をしました。

入学式後のガイダンス時には、「3つの種」をもとにオンラインで対話することを経験しました。初めて会う方と、オンラインでこれだけ時間をかけて自らのことを語るのは初めてでしたが、不思議と抵抗感なく話ができるものでした。これは、聴き手である方も同じような志をもって入学し、務める場所や役職などが異なっても、「学びたい」という思いが共通であり、受容の雰囲気のある対話が成立しているからではないかと思います。

その後のカンファレンスでは、オンラインでも対面でも経験をしましたが、話をしていくと、これまで自分の歩んできた教員としての道のりを改めて確認、再体験しているような気分になります。20代後半からがむしゃらに教科研究(社会科)を行ってきたこと、夜遅くまで学校に残って指導案を書いていたり、自宅に帰ってからさらに教材の準備をしたりしていたこと。学校を異動してから、校内研究を波及させることの苦勞、児童指導や保護者対応の困難さなど苦い思い出も含めて、自分の財産であることを気付かされました。教務主任を30代で務め、大規模校の職員をまとめることの苦勞や学校の移転作業の経験など、同期や同僚ができなかった経験は現在の自分の礎となる経験だったのだろうと、改めて振り返ることになりました。

現在の学校には、今年度に異動して着任したため、まだ慣れない部分もありますが、職員との関係性は良好に保てていると感じます。学校での業務がこの大学院の学びでの一番の柱となるわけなので、何も考えず惰性で過ごす暇はありません。

校内の巡回、先生方の授業の参観やPTAとのやりとりなどからも学べることが多くあるはず、と思っ一つ一つの業務を再度見直してみようと心がけるようになりました。例えば、前任校のときには取り組んでいなかった「副校長だより」を月に2回のペースで職員向けに出すようにしました。単なる業務連絡は書かず、児童指導のことや学校環境のこと、職員が取り組んでいることの価値づけ、授業に関すること

など、小テーマをもとにサイクルをつくって徒然に書いています。

他にも学校の改革を副校長の立場でどのように進められるか、日々考え、行動しています。小さなことの積み重ねで、学校が変わることもあると思っています。また、職員の意識が変われば、行動も変わり、

それが目に見えて分かるようになるだろうと思います。カンファレンスやRTで出会う、皆さんの話を聞きながら、自分にできることは何か、常に考えていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

## 学校改革マネジメントコース1年／埼玉県立小川高等学校

### 教頭 岡本 敏明 (おかもと としあき)

はじめまして、今年度から福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学した岡本敏明です。現在、埼玉県立小川高等学校教頭として勤務しています。

私は、大学卒業後、教育の世界に入り20年が経ちましたが、スタートは教員ではありませんでした。

大学在学中に教員採用試験に合格できず、学校事務として1年間勤務しました。生徒たちの学ぶ環境づくりに関わりながら、学校の仕組みを学ぶことができました。当時のことを思い出すと上司である事務部長は、間違いがあっても「答え」を教えてくれませんでした。必ず「もう一度考えて見て」と言われました。自分で根拠を調べたり、先輩等に聞きながら「答え」を作っていました。自ら課題を解決することだけでなく、他者と協働しながら仕事を進めていくことを学ぶことができたと考えています。

その後、数年間、臨時的任用教員として勤務し、高等学校の情報科教員として採用されました。

教員時代には、部活動、教科指導に夢中で取り組み、「成功体験が人を成長させる」ことを学びました。

初任校の部活動指導では、成果が出ない時期が多くありました。当時一緒に顧問を持っていた先輩教員からは、「成果が出るまで我慢、成果が出れば生徒は変わるから、焦らない」と言われました。生徒たちが小さな成功体験を積み重ね成長していく姿を見ながら、我慢すること、待つことの大切さを学ぶことができました。

2校目の教科指導では、協調学習である「知識構成型ジグソー法」に学校全体で取り組みました。授業が変わり、生徒が変わり、学校が変わっていきました。

当時、成果をとおして自分の成長を実感することができました。今思うと、自分の教材づくりや授業実践をとおして、同僚性の高まりが根底にあったのではないかと考えています。

そして総合教育センター、高校教育指導課と異動し、教育行政に携わりました。当時は、教員や生徒の学びを支援していくことが業務でした。教員とは全く勝手の違う世界でした。そこで初めて県民の視点ということ意識するようになりました。当時は思い悩むことも多く、自分の成長を感じられない日々がありました。

そのような中、埼玉県から島根県立隠岐島前高等学校へ1年間派遣され、主幹教諭として初めて学校経営側の立場で勤務しました。島根県の主幹教諭と高校魅力化コーディネーター、私の3人で「主幹チーム」を結成し、「学校業務見える化作戦」に取り組み、NITS大賞審査員特別賞多忙化改善部門を受賞することができました。

越境体験と多様な人達との協働をとおして、これまでの経験や価値観を一度手放すことで多くの学びを得ることができました。また、組織としての成長も実感することができたと考えています。

埼玉県に戻り、県教育委員会の生涯学習推進課で3年間地域と連携協働した探究学習の設計や教職員の越境体験プログラムに取り組み、現在教頭3年目となり、学校運営に取り組んでいます。

勤務校の課題として、20代から30代の教員が半数以上を占め、知識や経験が不足している若手教員が多く、学校の中核となる教員の育成が不可欠であることです。



自分の経験から、立場や状況が変わると求められる資質・能力が変わっていくのではないかと考えています。

教職大学院では、求められている資質・能力を自身自身がどのように身に付けてきたのかを振り返りな

がら、これからの人材をどのように育成していくかについて学びたいと考えています。

また、一緒に学ぶ皆様との対話とおして、学びを深め、学びの一助になればと思っています。今後ともよろしく願いいたします。

## 学校改革マネジメントコース1年／宮古島市立狩俣小学校

### 教頭 平良 優 (たいら すぐる)

みなさま、はじめまして。沖縄県宮古島市立狩俣小学校で教頭を務めております平良優と申します。昨年度まで、小学3年生の担任をしておりました。その学級担任としての感覚を生かしながら、教頭という立場で、よりよい学校組織づくりを進めております。

さて、みなさまは、宮古島にはいらしたことはありませんでしょうか。宮古島は、沖縄本島から約300キロ離れた美しい島です。青い空に真っ白な砂浜が広がり、東洋一と言われる透明で青い海が魅力的です。ここで、宮古島の絶景スポットをいくつかご紹介させていただきます。

・**東平安名崎(ひがしへんなぎき)**：宮古島の最東端にある岬で、太平洋と東シナ海を一望できます。断崖から荒波が押し寄せる迫力満点の景色が広がります。星空も最高です。

・**伊良部大橋**：宮古島と伊良部島を結ぶ全長3,540m(さんごのしま)の橋です。宮古島の青い空とエメラルドグリーンの海に囲まれている美しい橋です。ドライブにおすすです。

・**島尻のマングローブ**：水辺の遊歩道を歩きながら、マングローブ特有の植物や生き物を観察できます。亜熱帯ならではの異国間を感じるスポットです。

宮古島には、島民に受け継がれている言葉があります。それは「あららがま魂」です。沖縄は台風の通り道です。かつては、「台風銀座」と呼ばれるほど多くの台風が宮古島を襲っていました。その度に農作物が台風の餌食になっていました。そのような過酷な環境で培われた不屈の精神こそが「あららがま魂」です。「なにくそ！」と自分を奮い立たせるこの言葉です。

この言葉からは、宮古島の先人たちの「心の強さ」が感じられます。

沖縄方言には「いちゃりばちよーでー」という言葉があります。「一度出会った人々は皆、兄弟姉妹のようにつながっている」という意味です。人との出会いを大切にし、共感し、助け合うという、温かい心の文化を表しています。

この言葉からは、沖縄の先人たちの「思いやり」や「助け合い」の精神が感じられます。

また、「なんくるないさ」という方言もあります。その響きから「なんとかなるさ」と連想されます。そのため、面倒なことがあるときや、適当に物事を投げ出す場面で、「なんくるないさあ(なんとかなるよ)」と使ってしまうがちです。しかし、正しくは、「まくとうそーけーなんくるないさ」です。その意味は、「誠のこと、正しいことをしていれば、なんとかなるさ」という意味です。

この言葉からは、沖縄の先人たちの「凜としたひたむきさ」が感じられます。

私は、これらの言葉から先人達の文化や精神を受け継いできました。今後もその教えを生かしながら真摯に教育現場と向き合い、自分の立場でできる最適な取り組みを行っていきたいと考えております。

さあ、これから大学院で、どのような方に出会い、どのような対話をし、どのような気づきを得るのが楽しみです。

よい機会に恵まれたこと、ご縁に感謝を致しております。

どうぞよろしくお願いいたします。

## 学校改革マネジメントコース1年/富山県高岡市立福岡小学校

## 山口 武敏 (やまぐち たけとし)

今年度より、本教職大学院で学ばせていただいております。本教職大学院を知ったきっかけは、福井大学が窓口となって行われている社会教育主事講習を受講し、そのファシリテーター役の一人、三田村先生に声を掛けていただいたことです。ちょうど、わたし自身がこれからの学校教育の在り方に問題意識をもっていたことから、やってみようと思に至りました。ですから、他の多くの院生の方のように、教育委員会や勤務校の校長から声を掛けられているのとは異なり、自分で教職大学院で学ぶことを考え、入学試験を受けました。

この2年間でわたしが身に付けたいことは、学校の教職員が本当に“組織”として協働するようになるための働きかけ方です。管理職でもないのに、誰から頼まれたわけでもないのに、なぜ組織の在り方を学ぼうと決意したのか。それは、今を生きている子供たちの未来を憂いているからです。21世紀はこれまでの時代より変化が大きく先が見えないという中で、わたしたち大人が今の子供たちに何ができるか。本校に限らず学校現場は、正直戸惑っています。どのような目標に向かって子供たちの教育に携わっていけばよいか分からないまま、日々が過ぎて行っています。方向性が明確になることが必要であるとは、わたしは思いません。しかし、子供たちをどのように支えていくかについて大人が知恵を出し合いその方向性を共有することを棚上げすることとはちがうと思います。方向性がなければ、それは正に、“船頭多くして船山に上る”状態だからです。仮に、その船頭がしっかり考えて取り組んでいるならばまだその船に乗る乗組員は幸せでしょうが、考えていない船頭に乗った人たちはどうでしょう。人生の大切な時期を棒に振るようなものです。学校改革のキーワードによく「チーム力」が挙げられますが、このチーム力を発揮している学校が今、一体どのくらいあるでしょうか。私立学校であれば、建学の精神の下、学校が組織として目指す児童生徒の育成に取り組んでいることでしょう。しかし、本県は公立学校が圧倒的に多く、

公立学校の充実が子供たちの未来へのサポートには必要不可欠なことは自明です。今や県内で上位だとか、国内でトップクラスだとか、こうした次元で物事を考えている時代ではありません。本県の現在の教育大綱の基本理念にあるように、「ふるさと富山に誇りと愛着を持ち、地域社会や全国、世界で活躍し、未来を切り拓く人材の育成」に県内の教職員が一丸となって取り組まなければいけないのです。ですから、教育委員会や学校の管理職が「目指す子供像」と「目標を達成する組織の推進」を考えているだけでは、今関わっている子供たちが時代に取り残されてしまうとわたしは考えます。こうした問題意識が高まっていたときに、社会教育主事講習を受講しました。そして、さまざまな業種の方と研修を重ねるうちに、「これからの学校教育には社会教育士のような存在が必要である」と感じました。その中で、三田村先生の社会教育に対する熱い思いに触れ、本教職大学院の理念を知ることとなりました。

但し、今は、ここでやっていけるのか不安になっています。毎月のカンファレンスや7月のラウンドテーブルに参加して、院の2年目の方や他県の校長先生のお話を聞いたり、所属する学校改革マネジメントコースの先行事例や好事例に触れたりする中で、わたしのテーマである、「学校組織の改善」はやはりとてつもなく高い山であると感じました。諦めるつもりはありませんが、現在、取り組む見通しが立っていません。実は、本県には本教職大学院の特色である「学校拠点方式」で学んだ先輩教職員も、現在学んでいる仲間もおそらく全くいません。つまり、学校現場に学校現場が大学と連携して研究と実践を進める土壌が、今のところありません。本教職大学院が大切にしている新たな学校教育の展開を本県の教育機関が認知して根付くには、ものすごい時間がかかるのではないかと気になっています。

まずはこの一年間で、「学校の教育目標をより多くの教職員と共有すること」「組織の一つの変化や成長を自分の携わる教職員グループに起こすこと」「子供

たちのこれからのために何を目標としていくかを話し合うこと」を目指してやってみようかなと今考えています。わたしのテーマに詳しい先生、ぜひお力添えをお願いします。そして、院生のみなさん、テーマ

はわたしとちがっても、カンファレンスの際ご助言をいただけると、幸いです。こんなわたしですが、どうぞよろしくお願いします。



## インターンシップ・週間カンファレンス報告

### 関わりの時間を増やす

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立科学技術高等学校 松田 美穂子

いつの間にか、大学院生活も残り半期になった。昨年度に引き続き、今年度も福井県立科学技術高等学校でインターンシップを行っている。今年度も産業デザイン科で授業実践させていただいているが、主に参観させていただき学科を産業デザイン科から機械システム科に変更していただいた。少しだけはあるが環境に変化があり、学び多きインターンシップ生活を送らせていただいている。また金曜カンファレンス（以下、金カン）では、運営にも携わるようになった。インターンシップや金カンでの学びについて述べていきたい。

インターンシップでは、機械システム科の生徒と過ごすことが増えた。産業デザイン科は、男子数人で大半が女子のクラスで、機械システム科は、男子しかないクラスである。クラスの雰囲気や困りごとの違いを感じた。産業デザイン科は生徒同士の人間関係のこと、機械システム科は遅刻のことや課題の未提出に関することがあった。男女の違いで、クラスで起きる内容が変わってくるのだと感じた。

生徒との関わりについてであるが、昨年度は生徒と関わりすぎることによって授業に支障が出てしまうのではないかと思い、産業デザイン科の生徒と深く関わることを避けていた。しかし、今年度は授業実践する時間を減らしていただいたため、授業時間外での会話など生徒と関わりを増やしてみた。その関わりから、生徒の意外な一面を知ることができたり、頑張っていることを知れたりすることができた。特に授業実践した際には、素直な意見を引き出すことができ、

クラス全員の顔や様子をみて授業に反映させながら、授業を進めることができた気がする。まだ、機械システム科での授業実践は行っていないため、どんな雰囲気になるかは未知であるが、適度な距離感を守りつつ、自分の立場や年齢に合った関わりを増やしていきたいと思った。

授業実践では、昨年に引き続き産業デザイン科の繊維・染色技術で授業実践を行った。昨年度は、知識や技術を教えなければという思いに駆られてしまっていたが、やはり生徒にとってやらされている感が否めず、授業の方法を変えたいと思った。そこで、今回は、生徒が気になったことや疑問から生徒主体で考える授業を意識した。生徒らは、いつもと違った授業と感じたようで「楽しかった」「面白かった」という声や「難しかった」という声があった。「難しかった」という生徒の声も大切にして、夏休み明けの授業実践に活かしていきたい。

金カンでは、昨年度と同様に1の時間でインターンシップの振り返り等を行っている。後輩がいるという昨年度とは違った状況で、私自身も昨年度悩んだ内容で共感したり、私にはなかった視点で考えていて新鮮味があったりした。自身が考えていることについて話して、新たな視点から考えることができる充実した時間となった。特に「学級経営って?」「子どもが求めているものって?」「振り返りって必要?」など、様々なことを深く話すことができ、自身の学びの成長を感じた。また、自分の取り組みが無意味だと

思っていたときに、先生方にコメントを頂き意味を見出すきっかけとなることもあった。

また、運営に携わることになり、授業の方針を決めたり、意味を考えたりと話し合いを進めてきた。「こうした方がいいんじゃないか」「それだとだめだと思う」と話し合いながら、昨年度の先輩方から引き継いだものや違ったものも取り入れながら、不備もありつつ、最善の学びや活動となるように努力してきた。しかし、院生一人ひとりの生活は忙しく、金カン、インターン、研究、教員採用試験、その他・・・と注力したいこと、時間をかけたいことが違っていることを改めて感じた。

共通した思いを持っていても、実現するまでの手段が違ったり、力の入れ具合が違ったりして、大人数

で同じものを作り上げることの難しさを改めて感じた。どの学校現場でも、どんな企業でも、きっと同じ悩みが出てくると思う。その中で、自分と相手のどちらも思いも大切にしていくことが大切だと思った。金カン以外の時間で院生と話したときに、本音を知ることができたり、深い想いを知ることができたりすることがある。何かをやり遂げようとするとき、決まった時間や活動のみで完結させることは、きっと難しいのだと思う。いろいろな時間を活用して、院生同士のコミュニケーションを大事にしたい。

この半期で学んだことを、しっかりと振り返りながら、残りの半期も自分の軸を忘れずに常に学び続けていきたい。

## 変わりゆく環境を改めて捉え直す

### 授業研究・教職専門性開発コース 2年/岐阜聖徳学園大学附属小学校 松河 圭亮

教職大学院に進学して、早くも2回目の夏を迎えようとしている。毎週、月曜日から水曜日の3日間、長期インターンシップに実践を経て、毎週木曜日の週間カンファレンスで自身の実践を語る中で省察し、理論化していく。このサイクルで学びを歩んできたが、2年目ともなると流石に慣れが生じて、なかだるみしがちになってしまう。だからこそ、今回のニュースレターでは、立ち止まって、4月からの自身の足跡を改めて振り返ってみることにした。

長期インターンシップでは今年に入ってから変わったことが2つある。

1つは、同期が福井大学へ行ったことである。私は岐阜聖徳学園大学附属小学校へ長期インターンシップに行っているが、去年までは同期と2人、附属小でのインターンシップであった。だが、同期が更なる学びを求め福井大学の方へ移動してしまった。1人で心細いだけでなく、今年から後輩2人が附属小でインターンとなり、先輩としての対応を求められるようになった。その同期の子はとてもしっかり者で、私自身、その子に頼り切っていた。その同期がいなくなり、自分自身がしっかりしなくてはならない状況に

なり、不安ながらも、後輩を引っ張っていけるように頑張ろうと決意した。

もう1つは、非常勤講師として1年生の生活科と3年生の体育を任されるようになったことである。昨年度の冬から訳あって非常勤講師を任されていた。今年度も非常勤講師を頼むかもしれないと校長先生に頼まれてはいたが、まさか、関わったことのない1年生の生活を任されるとは思わなかった。ただ、任された以上、期待に応えられるようにしっかり取り組んでいきたいと4月に決意した。

このような状況の中で長期インターンシップでは、去年以上に自分が教師としての意識をもとうと取り組んできた。特に1年生の生活科では、子どもの願いを重視しつつ、全員がつまづくことがないような支援を工夫してきた。例えば、「はるみつけ」では子どもの「草花で遊びたい」という願いから、遊びの中から春を見つける活動を行なった。また、七夕飾りを作るときは、タブレットで手元を映しながら一つ一つの作業を確認しながら進めることができた。また、叱らなくていいような指示の出し方を考えることができた。1年生ということもあり、騒いでしまい、なかなか指示が伝わらないことがある。そのたびに叱

っている、子どもも教師も疲れてしまう。そこで手遊びから発想をえた、手拍子 3 回の指示出しを編み出すことができた。3 回の手拍子に合わせて「聞いて・くだ・さい」と声をかけ、子どもは 3 回の手拍子にあわせて「いい・です・よ」と応えてもらう。こうすることで、指示を伝えやすい場を作り出すことができた。このように、いちいち叱らないですむ方法を見出すことができた。

週間カンファレンスでは、去年は同期が 3 人で先輩もおらず、試行錯誤しながら進めてきた。今年は同期が 1 人減り、後輩が 3 人増えた。その結果、院生が 5 人に増えて、より様々な視点から語り合うことができるようになった。後輩が 3 人増えて、先輩として引っ張っていかなくてはならない。そんな思いから、ファシリテーターを進んで務めるようにしている。また、2 の時間や 3 の時間も積極的に取り組んでいる。昨年度は、マネジメントの時間(3 の時間)の後に自分たちで学ぶ時間(2 の時間)が設定されてい

た関係で、だらだらと 2 の時間を過ごしてしまった。その反省を活かし、今年は 2 と 3 の時間を正しい順序に戻し、2 の時間では、院生同士で何をしたいかを話し合い、今年度は評価について学ぶことができた。そして、3 の時間で今後どのようなことをしていくのかを院生同士で考え、自らの学びをデザインできるようになりつつある。

改めて立ち止まり自身の学びを振り返ってみると、昨年度とはまるで異なっていることに気づいた。だからこそ、昨年度と同じように学ぶのではなく、変容している現状を明らかにした上で、その現状にあった学びをデザインしていかななくてはならない。院生として残された時間を、自分自身や院生たちのより良い学びになるように、最後まで思考していきたい。ただ、7 月に入り、体調不良に悩まされ、インターシップに影響が出ている。今後、夏期集中も始まるが、健康に気をつけ、精一杯取り組んでいこうと思う。

## 2年目の「心の余裕」

### 授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市明新小学校 滝波 もも加

大学院に入学してから早くも 1 年と半年が経ち、大学院での生活に自分の時間が作れるほどの余裕ができてきた。1 年前、最低限のノルマをこなすことで精一杯だった自分とは違い、今の自分は、環境に慣れてきたせいかわず心の余裕があるように感じる。活動の効率が良くなり自分自身と向き合う時間を十分に確保できるようになったが、環境が変わらないことで生まれる心の余裕に危機感を覚えている。

今年から週 2 回になったインターンでは、昨年度と同じクラスの子どもと関りながら子どもの見取りを行っている。1 年前は、子どもの名前を覚えたり、教員の動きを覚えたりと、新しい環境に慣れることに必死で、毎日新しいことを吸収していたが、2 年目になると要領をつかみ落ち着いて取り組むことが出来るように思う。しかし、今の自分の姿に何か納得がいかない。その原因を考えたところ、1 年目と同じことをこなしているだけのインターンで終わって

いるからだ気が付いた。子どもの見取りや授業実践など、自分の実践に関しては少しずつ方法を変えているが、それは 1 年目でも行っていたことで、新たに何か挑戦するということはあまりなく、毎日の生活がルーティーン化してしまっていた。環境に慣れていくと、新しい視点を自分から取り入れようとしない限り学びはないことを自覚していたつもりだったが、今の自分は成長が感じられない。そんなことを感じながら何を換えようか、何に挑戦しようか悩む日が続いた。

あるインターンの日に、メンターから完全に指導を任されたことがあった。その時、任されたところまでは指導を行ったが、そこから先のやるべきことも把握していたため、自分の判断で指導を行った。インターン生としての立場を考えると、自分の判断で動くことはやってはいけないことかもしれない。しかし、インターン生の立場を理由にして目の前で子ど

もの悪行を見逃すのも良くはない。そんな気持ちの葛藤の中、初めて行動に移した。その結果、指導法の改善点が明確化され、たくさんの学びが得られた。

「学び続ける姿勢を大事にしたい。」と、私はよくカンファレンスで口にする。それが言葉だけで終わってしまっていたことに気付かされた日だった。

「環境に慣れることで生まれる心の余裕」は、時には必要だ。しかし、それは自分の成長を妨げる原因に

もなる。インターン2年目で初めてその危機感を覚えた。2年目の「心の余裕」をどう生かすのか。人間である以上、楽な道に進みたくなるが、そこでどう自分を律し自身の成長につなげるか。この危機感は成長するために持ち続けたいと感ずる。毎日が何の変化もなく過ぎていかなないように、実のある時間になるように、変化を求めてこれからもインターンに努めていきたい。



## ミドルリーダー/マネジメントコースだより

### 自分の危うさを知る

ミドルリーダー養成コース2年/札幌新陽高校 号刀 悠貴

今の勤務校の担当する部署の関係上、4月～7月が私の年間を通じた最も繁忙期であった。私が担当する部署は「生徒会」で、「生徒会」と言えば学校祭である。7月の学校祭に向けて、昨年の12月から動いていた。この学校祭というビッグイベント以外にも、生徒会行事というものはこの時期に集中する。加えて、新一年生の担当であり、本当に忙殺されていた。あまりに毎日が一瞬で終わってしまった。自分が大学院で何を感じていたのかを思い出すことができなかった。そこでレポートを改めて読み、少しずつ思い出すことができた。今年度、頑張りたいことを4月にはっきりと描いていた。しかし、進めていくにつれて、私の中で何かが引っかかる。「本当にこれでいいのだろうか?」、「これが掲げている問題に対して解決するために本質的であるのだろうか?」、「そもそも、他に目をやるところがあるのではないだろうか?」。日々、その迷いや悩みの霧は、濃くなっている。

私が今年度、力を注いでいることは教員研修だ。毎年、教員の入れ替わりが多い職場で、何とか人が辞めずに、明日も元気に働ける環境を作るためには何ができるのだろうか?そんなことを考えて、「キャリアステージ別研修」を企画し、進めている。内容を簡単に記載すると、若手の先生に対して、ミドルからベテ

ランの先生(伴走者)をペアで配置し、若手の先生の日々の困り感や課題を共同探求していくものだ。若手の先生にとっては、まだわからないことが多い時期に、自身の困り感を聞いてくれ、同時に困っていることや課題の解像度を高めてくれる相手がいることは、精神的にも支えになり、課題を明確にして日々の仕事に取り組めるのではないだろうか。ペアとなっている伴走者にとっても、若手の悩みや課題に寄り添うことで、新たな気付きや学びを得られるのではと考えた。

先日、福井ラウンドテーブルのクロスセッションを模した、実践報告と対話の場を、この研修の一つとして校内で実施した。多くの課題や欠陥があるのだろうが、私にとっては実践報告がされている光景は感慨深かった。私は2019年から、福井ラウンドテーブルに参加し、クロスセッションを通じて学べたことに喜びがあった。この学びや喜びを、仲間と共有できないか、高め合えないかと考えていた。模したものが、それが自分の勤務校で実現した。その光景は単純に嬉しかった。しかし、喜んでられない。テーブルによっては、実践者の学びが深まっておらず、実践報告は非常に浅いものもあった。ペアとなっている伴走者の支えが明らかに不足しているものもあった。この校内クロスセッションは、12月にも行う予定で

ある。どのようにすれば、若手の先生にも、ミドルからベテランの先生にとっても学びになるかを考える必要がある。

しかし、私の最大の悩みは、職場の大掛かりな研修を、私がこのまま進めていいのだろうか？という問いだ。私は、今の職場の大量離職に対して、自分でできることは何かを考え、実行している。それが、教員研修であり、人材開発である。しかし、本来は私が人材開発されるステージであり、レベルなのである。教師としての技術や判断力が、然るべき場所に達していない中、この研修を進めていることに危うさを感じている。もしかすると、この研修を進めたこと

で、結果的にさらに大量離職を促進させてしまうかもしれない。組織力を低下させることになるかもしれない。同時に、私が今のキャリアステージで本来身につけるべきことを捨て、管理職がやるべきことに手を出し、私はこれでこの先も教師として役に立てるのだろうか。これが、研修の手段に対しての悩みよりも遥かに濃い霧の正体の一部である。かつては、何でも「自分が頑張れば」と進めてきたが、今は、自分が頑張って進めてしまったことが、結果的に組織の停滞化を促進させてしまわないだろうかという怖さを抱えてしまっている。この霧を、夏期サイクルで少しでも晴らしたい。

## 対話を通して得られる学び

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立若狭高校 澤田 更紗

教職大学院に入学し、あっという間に2年目に突入した。今年度は、3年生の担任をしていることもあり、日々の指導、進路決定、最後の行事…と4月から今日まであっという間に時間が過ぎていった。そんな中で、この教職大学院での時間は、自分のこれまでをゆっくりと振り返り、やってきたことの意味を考える時間になっている。これまで、合同カンファレンスやラウンドテーブルに参加し、他の先生方と対話をすればするほど、自分が考えていることが形としてはっきりしていく感覚に何度もなった。

私が勤務している若狭高校では、対話をするのを大切にしている。受験指導もあり、忙しい時期ではあるが、クラスのメンバー同士での対話も大切にしたいと思い、久しぶりにクラスみんなでp4cという哲学対話を行った。その時に生徒が言った、「うちら去年が1番対話上手やったよな」という言葉が、とても印象に残っている。昨年度の11月頃、私は授業内でも対話に重点的に取り組んでいた。対話をしなくなると下手になるという感覚を生徒と一緒に私も感じることもある。「下手になっている」と感じる時は、他者に対しての受容や、自分が他者に受け入れてもらっているという感覚が、鈍ってしまうような気がしている。

このことを、先日のラウンドテーブルでお話させてもらった時に、色々な反応を頂いた。「対話が下手になる」とはどういうことなのか。「生徒が感じている感覚」は何なのか。他の先生方が生徒のこの言葉をどのように捉えるかをお聞きし、また、自分自身がどのようにその言葉を捉えたかということに改めて語りあうと、ぼんやりとした感覚で捉えていたことが、言葉として形になるのを感じた。私自身が、「対話が上手くいった」と感じている時は、こうして自分がなんとなく考えている感覚がはっきりと輪郭を持った時や、他の人のお話を聞いて自分の考え方がより広がったと感じる時なのではないか。

教職大学院の学びはその連続であるように感じている。もちろん、毎回のカンファレンスのあとに「うまく話せた」と思うわけではないが、うまく話せなかった時も含めて、どうしたら自分が考えていることが伝えられるのかということを繰り返し考え、振り返ることで自分の考えが明確になっていく。教職大学院では、自分が受け入れてもらっているという安全な感覚を持って対話できる場面がたくさんある。

そういった場面を、クラス内・学校内に沢山作っていくことを今後も課題としていきたい。同じメンバーで対話していても「うまくいかない」と感じること

がある中で、どうしたら安全だと感じるコミュニティを広げていけるのか。まだ自分の中ではっきりと答えがあるわけではなく、またコミュニティによって答えも違うのではないかと思うが、教職大学院での

学びを還元していくためにも、「対話によって芽生えるもの」とは何なのかについて明らかにし、考えを深めることのできる対話の場を作るために自分ができることを考えながら実践していきたい。

## 生徒の主体的な学びを展開する環境をつくりたい

学校改革マネジメントコース2年/江東区立第二南砂中校 山田 泰子

14年間お世話になった品川区から、この4月に昇任異動した。江東区には趣味のテニスでは頻繁に来ていたが、学校教育関係で関わったことは一切なく、区の教育施策も、関係行事も、教育会の動きも全くわからない。それどころか、長くいた品川区では、担当教科や分掌主任関係、管理職の先生方や教育委員会の先生など、多くの人と知り合い、支え合ってきた。今回、自分のことを知ってもらっていた環境から、全くのアウェイな環境に異動した。

私は長く主幹教諭として生活指導主任と学年主任を中心に学校運営に携わり、学年経営を楽しんできた。その分、管理職や副校長の職務には一切興味を持ってこなかった。現在、個々の先生方の活躍を支えるために必要な勤怠管理の仕組みを少しずつ理解しながら、毎日初めて出会う新鮮な事務仕事と向き合っている。その点、伸び代しかないと思っている。

4月から勤務している学校は、全14学級、全校生徒470名の比較的大きめの学校だ。生徒は非常に落ち着いた状態で、教員の指示に素直に従う。PTAも非常に協力的で、新米副校長としては非常に頼れる組織である。教職員の年齢層の幅も広く、ベテランの先生も多い。若い先生方もフットワークが軽く、ベテランの先生方の経験と小回りの効くフットワークにより、学校が動いている印象を持つ。

3月まで勤務した学校の最後の年は、大人のコントロールが効かなくなった学年を引継ぎ、集団規律と教員との信頼関係構築から積み上げるという非常に苦労した1年間を過ごした。福井大に入学した初年度なのに、特に1学期は目の前の様々な教育課題と向き合い続け、精神的にも非常に苦しい思いをした。夏の集中講座でこれまでの実践を振り返り、捉え直した実践を2学期から取り入れ、周囲の先生だけ

でなく、地域の力、関係機関の力を巻き込んでいったことで、9月中頃には生徒も落ち着き、次第に気持ち前を向く集団となった。しかしここで異動となる。もう1年、卒業まで見届けたかった。

昇任異動による4月のパニックを抜けた頃から、学校の課題が少しずつ見え始めた。前述の通り、経験とフットワークにより、土壇場で学校が回っているという現状だ。今年度異動してきた先生は私以外に7名。細かなことが確認できないまま先に進む日々。先の見通しがもてない予定表や要項。生徒に活動させることが目的化している各行事。経験に縛られているのか、或いは、先の見通しがもてないため、やむを得ず経験でその場を凌いでいるのか、形作ることが優先された、生徒の主体的な学びが中心に置かれていない教育活動が展開されている。

標準服と体操着、ジャージが約15%値上がりする。次の新入生の保護者の負担額が10万円に届きそうになることがわかった。そのことを受け、現段階では夏服は購入しなくても良いことにする予定だ。すると新たな問題が発生する。「(春の終わり、または秋の始めにある)修学旅行は標準服では行けなくなるのか?」これは、絶好のチャンスだと思っている。本校では全く展開されていない生徒主体の行事を使った学び。一部の生徒だけではなく、少なくともその学年全員がこの課題と様々な観点から向き合って、自分たちの修学旅行を創り上げさせるチャンスである。そのためには、3年生になってからでは遅い。主体的な活動によるトライ&エラーを1年、2年と段階を踏んで積み重ね、力をつけていく必要がある。そんな生徒主体の学習活動を展開するために、先生方がこれまでの実践を語り合い、刺激を受けながら新たな発想をし、更にたくさんの対話を重ね、試行錯誤しな



から、生徒の深い学びを実現する行事を使った学習を展開してもらいたい。夏、今やっとその仕掛けをしていこうとしているところだ。

## 意図的・計画的に実感を持たせる工夫

### 学校教育マネジメントコース2年/西原町教育委員会 前 幸三

私は、4月から校長職から西原町教育委員会へ人事異動となった。校長室という部屋があり、自分のスタイルやペースで物事を進められる立場から、一転し、上司にお伺いをたてたり、学校、校長先生方を支援したりする立場となった。頭の切り替えに苦労する反面、校長職という全体を司ることから解放されて、少しホットした気にもなった。改めて校長職の重責や学校経営、先生方や生徒のやる気に火をつけることのエネルギーの大きさや地域や保護者、教育委員会の支えの元に学校が成り立っていたのだと痛感した。今度は、教育委員会として学校への支援を第一に考えたい。以前の指導主事としての経験と福井大学の教職大学院で学ばせていただいたことを何とか活かした支援ができたらと思う。職場は、同僚の皆さんにも優しく丁寧に接して頂き、恵まれている。各種学力テストも全国レベルであり、地区を牽引する状況である。各学校のネット環境は、特に問題ない。しかし、役場のネット環境や広範囲な業務に慣れるのに苦労した。無害化を手作業で行っている。教育事務所からのメールを小中学校へ一つ転送するのに、今でも10分ほどかかる。送受信後は、收受の事務作業も行う。また、URLは見ることはできない。情報保護の面から数年前にこのようなシステムになったようだ。1g、ミライム、ウィッチ、スクリレの4つを駆使する。来年の夏頃には改善されるというnewsが最近では、職場での大きな話題となった。

また、各学校でのデジタル教科書の設定は、各学校の先生方で行っている。夜中11時までかかったという話も聞く。普通なら苦情も増えそう。もちろんあるだろう。しかし、あまり出てこない。これは、先生方の大変だけどシステムを自分たちの手で構築するんだという意識や手伝う同僚性の高さはもちろん、主事や職員の常日頃の対応が大きい。予算面や今後

のネット環境の説明を丁寧に行うことや、生徒指導等各種のトラブルの際に頻りに学校訪問を行う姿勢、夜中2時ごろまで学校の不具合を直す電算担当の仕事ぶりによるものである。先生方にとって頭が下がる思いであろう。この様を見て、福井大学で学ばせていただいた相手意識や目的意識を持ち接することで協力や理解が得られると実感した。

さて、この約4ヶ月で現状を踏まえた取組をご紹介したい。まずは、校長会を含む各種研修会、連絡会で協議の時間を設定し、計画的な議論の場を提供したことである。

昨年度まで校長会の後半に設定されていた情報交換を協議型に変更した。教育長から校長会を活性化したり、刺激を与えたりして欲しいという要望があった。それは、町内6小中学校の管理職の人事異動は2年間一人もなく、変化が少なく感じたようであった。そこで、各学校長には事前にテーマを決め、自校の取り組みや課題などのレポートの提出を求めた。そのレポートをもとに50分の協議を実施した。時間は、あっという間に過ぎた。校長先生方のコメントには、他校の校長との焦点化された語り合い、聞き合いに対する肯定的な意見ばかりがあった。これを踏まえ教頭会や各種主任会も協議を中心にする形式に移行させている。また、年間の各種研修会や連絡会での議案については、議案を一覧表にして提示している。これは、校長会、教頭会、生徒指導主任会等で関連を持たせたり、取り組みの整合性を持たせたりするためである。議案については、参加者の要望等で変更可能である。

2つ目は、情報交換を密にスピード感を持って対応する関係性づくりということである。近年、温暖化のせいか、線状降水帯が発生し、大雨警報が発令されることもある。先日、本町でも大雨警報が発令され、明

け方にはアラートが鳴るという事態になった。そこで、教育委員会にも朝早くから心配した保護者から学校の登校に関しての問い合わせがあった。台風の際は、町全体での休校の判断は、可能であるが、土砂崩れや大雨については、各学校で条件が異なるため学校判断となる。そこで、各校の大雨の対応の先行事例をさぐった。すると A 小学校では、頻繁に冠水が起るため学校独自に大雨時の対応を学校として決めていた。そのデータを町内 6 校に提供した。すると、すぐに 2 校が学校の立地条件に合わせた大雨対応のガイドラインを作成し、学校運営協議会や PTA との協議のもとスクリーンで各家庭へ周知された。台風シーズンも控え保護者からは、対応について困り感を抱いていたが安心したという連絡が学校にあったようだ。

また、熱中症アラート発令時の対応について中学校から教育委員会に問い合わせがあった。この際も、各種通達の再送による情報の周知と各学校判断になるということを伝えた。するとすぐにその学校は、熱中症への対応を先生方と話し合いで決めていった。そして、実践を通して熱中症の対応を、先生方が話し合い加筆修正していくということであった。この情報は、隣の中学校にも伝えられ、その学校でも対応を急いでいる。このように約 10 日間に、大雨や熱中症

対応を学校が主体となって進めていったことは大きい。保護者の学校に対する信頼の構築や各校での協議ができる土壌があることを示していただいた。起きている事象について主体性を持ち解決する学校組織を構築したい。「チーム NISHIHARA」でどんな難局も力に変えたい。

他にも、特別支援教育の充実や授業改善のための地域の大学との連携協定の構築、GIGA スクールなど推進したい業務もある。まずは、やることの確認、できているかの確認からはじめたい。

最後に、大学院での対話を通して答えらしきものを出す工程を繰り返すこと、聞き合うこと、語り合うこと、記録に残すこと、振り返り、他人の考えを大切にすること、本を読むことで個人思考する時間が充実してきた実感がある。どの環境にあっても多くの協力やアドバイスを頂きながら現状を変えるプロジェクトを、学校や地域と試行錯誤しながら創造していきたい。そのことが、学校や地域のやる気につながると考える。「やってやろう」意欲の相似形も期待したい。個人的には、福井県教育センター所長北川先生が主催する校長先生方を対象としたオンライン研修にも参加させていただけた。このようなご縁も大切にしていきたい。



## 7 月ラウンドテーブル報告

### 他者による授業の価値づけによって生まれるもの

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立丸岡高校 黒瀬 玲凱

今年の 2 月に行われたラウンドテーブルでは、昨年度 1 年間の丸岡高校全日制での活動をまとめた。化学基礎の授業を行う中で、生徒と自分の目線の乖離に気づき、生徒自身が自分の持っているものを使って新しい学びを得るためには、どのような問いを立てたらよいのだろうかという問いと闘い続けた記録だった。最後は、持っている知識から新しい知識を獲得する筋道までは見えてきたが、“高校”化学とし

て身に着けてほしい視点までたどり着くにはさらなる工夫が必要だと感じ、もう 1 年頑張っていくと締めくくった。

しかし、今年度は大きく状況が変わり、丸岡高校の定時制で非常勤講師として勤務することになった。

まず、生徒の多くは集団での学習や生活に困難を抱えており、学校が生徒らにとって「安心して過ごす場所」となり、「自分にもできたという成功体験を

積み重ねる場所」でありたいという学校の方針を学んだ。

次に、先輩理科教員から、「ノートを取れないから、穴埋めのプリントを作成してほしい。」「教科書の本文を1文ずつ生徒に読んでもらい、必要な場所を解説し、必要に応じて板書を行い、プリントの裏に移してもらおう。それから、生徒に穴埋めをしてもらい、全員が穴埋めを終えたら、次の部分で同じことを繰り返す。」という授業形式を提示された。想像していた以上に作業的な授業が求められ、私が行ってきた考えることを前提にした授業はここでは難しいのかもしれないと思い、助言通りの授業を行ってみることにした。

そこから3か月間の私の葛藤を、今回のラウンドテーブルのクロスセッションで報告した。

葛藤の原因は作業的な授業の是非にある。穴埋めのプリントは教科書を見るだけで埋めることが可能なものであったが、それゆえに教員が解説をする前にプリントを埋め始める生徒が出てきた。「私は教科書から抜き出す能力を育てたかったのだろうか?」「ただ写しているだけで、理科的な見方考え方が育つのだろうか?」という疑問が私の頭を支配しつつも、日々の忙しさにかまけて、授業形態を変えられずに過ごしてきた。

そのような報告をしたところ、幼・小の先生方から、「プリントの穴埋めで得られるのは、本当の成功体験なのだろうか?」「生徒たちは、自分たちが将来ど

のようになりたいと考えていて、どのような力を身につけたいと考えているのだろうか?」という声をいただいた。生徒のためと言いながら、肝心の生徒個人に目を向けられていなかったことに改めて気づかされた。彼らは”定時制の生徒“ではなく、それぞれ一個人である。学校全体のテンプレートを押さえることも大事ではあるが、その枠の中で、目の前の生徒個人に合わせた授業を展開していくことが求められているし、去年はそう思っていたはずである。

「定時制だから」という所に縛られすぎて、昨年まで頑張っていた”生徒が自分で考えられるように”とか”理科の楽しさを感じてほしい“という部分がだんだんと薄れていっているのではないかと問われたときに、この3か月、自分が大事にしてきたことを押さえつけてきたことに気づかされた。夏休みの中に、「高校理科で学んでほしいこと」「受け持っている生徒ができること」を整理し、他の先生方と情報を共有して、生徒にとって楽しく、学びのある授業が展開できるよう準備をしていく。

この報告会がなければ、私はあと1年葛藤を抱えたまま、同じ授業を繰り返していたことであろう。自分の活動を振り返り、他者に価値づけしてもらう中で、生徒を見れていない自分、理科とひたむきに向き合う自分、自分の良さも悪さも気づき、新たな一步を踏み出す勇気をもらった。定期的な省察の場があることの意義を改めて感じる事ができた。

## ラウンドテーブルを終えて

ミドルリーダー養成コース2年/さくら認定こども園 山田 ゆみ

Zone Aの実践発表で、印象的だったことがいくつかあった。そのうちのひとつは、発表者自身が楽しそうに実践を語る姿だった。資料には子どもたちの写真がたくさん掲載されていて、自身で語りながらも写真を見てフッと笑みが出る発表者の姿がとても輝いて見えた。子どもと一緒に、同僚と一緒にそれらの活動のプロセスを楽しんできたことが発表者の姿に表れていた。チームでやってきたということがよく伝わった発表であり、Zone Aの主題である『子ども

の主体的な学びを支えるコミュニティ』そのものを感じることができた。

この発表を聞く前、発表者の先生とたまたま同じグループで一緒に話をする事ができた。先生自身はクラス担任をしていない立場であり、以上児各クラスの担任は一人ずつだとお話されていた。そんな園の環境を踏まえながら発表を聞いていると、各担任と共に探究活動に関わってきたことは必然であっただろうと思う。しかし必然であったことよりも、各

担任と関わりを持つようとしてきたことは明らかだった。一人で子どもを見取れば主観的になる。よりたくさん目の子どもを見取り、共有することで先入観が取り払われていく。しかし共有するためには語り合わなければならない。そもそもなぜ語り合わなければならないのか、ということについては次の中学校の発表でも投げかけられていたが、この園の実践にも繋がっているだろう。

そうはいっても、日々の保育の合間に語り合うのは簡単ではない。こども園での勤務時間内に、子どもがいない時間はない。15分という対話の時間を作り出すことができたという話をよく耳にするようになったが、今のクラスの担任間だけの話でいうとたった4人すらそろわない。はじめは担任が全員そろって話をするにこだわっていたが、そこにこだわり続けてしまったらいつになってもできない。できる園もあるだろうし、できる年もあるだろう。状況は職員配置によっても毎年変わるが、現在のクラスでは難しい。その要因はいくつかあるが、担任それぞれの勤務体制の違いが一番大きい。

時々、昨年の夏期集中で読んだ「コミュニティ・オブ・プラクティス」を思い出すことがある。自分の役割とは何なのかを、この時初めて考えるようになった。はじめは、園の中での自分が中途半端なところにいる気がしてならなかった。その立場でできることは何だろうかと思っていたし、教職大学院に来たからには何か大きなことを成し遂げなければならないとすら思い込んでいた。語り合いについてもそうで、意味のあるガチガチの語り合いを担当みんなでしたい、正規の職員以外の先生も巻き込みたいという思いを自分の中でだけ求めていた。しかし、他者の考えや思いや他の学校の取り組みを聞いているうちに、全員にこだわる必要はないのではないか。必ずしも語り合いという固いものでなくても良いのではないかと自分の考えが変わっていった。結局、自分が聞きに行こうと意識しながら、自分の足でまわるのが一番良いのかもしれないと思い始めた。「語る」とい

うことが、研修のような固いイメージのある人もいるだろう。パートや臨時職員の先生方にとってはなおのことかもしれない。「何か話さなければならない」と感じる場所よりも「話したい」と感じる場所の方が、「話してよかった」「また話したい」と思える。自分もそうであったはずなのに、逆のことをしようとしていたのだ。

小学校の発表でも語り合いを大切にした取り組みの発表があったが、『語ろっさ』『ふらっと参観』といった緩いイメージを残したネーミングが付けられていた。取り組み内容もその言葉にそったものであったが、人に与える言葉のイメージは効果絶大であると感じ、ネーミングのセンスの良さにも感動した。緩さを残すことで、「緩さによって生まれる強さがそこにある」という一言が今の私の中にピタリ！と当てはまった。

今回、私もグループ内の発表者であり、クラス内の探究活動のひとつの事例を聞いていただいた。ラウンドテーブルに何度参加してもドキドキするのは、自分の考えや思いが相手に伝わるだろうか？自分の語りで実践の面白さが見えてくるだろうか？幼児教育の話がどう理解されるのだろうか？そんなことが頭によぎっての緊張や不安からである。だが、話をしながら感じる周りのうなずきの気配や、発表のあとにいただく質問で、興味と関心を向けてもらったのだと感じることができてホッとした。また、伝えたかったことが上手く言葉で表現出来なかった部分をファシリテーターの先生に代弁していただいたり、価値づけてもらったことで、伝えることができた！と満足した気持ちで終えることができた。この気持ちは、子どもたちも同僚も同じだろう。安心して自分の考えや思いを出せることが主体性を発揮することにつながるのは自分の経験からも充分理解できるようになった。これを同僚や子どもたちに還元できるよう、私には何ができるだろうと考え続け、試し、取り組んでいきたいと思う。

# ラウンドテーブルに参加して

## 学校改革マネジメントコース2年/玉ノ江こども園 荻原 慶子

ラウンドテーブルは今回で3回参加させて頂くこととなった。「子ども達が主体的に生活し、学び、あそぶとはどういうことなのだろう。子ども達の主体性を保障するという事は、私たち保育者はどのように子ども達を見取っていくことが必要なのか」という私の中の悶々とした思いがある。そのような思いを持ちながら、Zone A: 子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ～子どもから学ぶプロセスを探究する～に参加した。

始めに小林真由美先生(福大)の「子ども達が主体的に学びを深めていくために、子どもの声や姿を真摯にとらえて、子どもから学ぶプロセスを探究し、大人が自分を変えようとする姿も大切である。子どもと共に、あるいは子どもから学ぶ場を教師はどう組織していけばいいのだろうか。これまで『教える専門家』であった教師は『学習を組織する専門家』を目指していく必要がある。子どもと共に学ぶために、教師は何をどこまで支援すべきか、組織すべきかという新たな課題も見えてきた。」という話から始まった。まだまだ「教える専門家」になってしまう私だが、「教師は何をどこまで支援すべきか」という所では、この「支援」が行き過ぎると、教師が引張っていつているのではないのだろうかと思ふところになってしまう。今回、発表をされるお二人の先生から、子ども達の声や姿からどのように学び、それをどのようにして学びの場に取り入れていったのかを知りたいと思った。

きたこども園の水谷先生の発表からは、一人の子どもの声を丁寧に拾い上げ、子どものやりたいに保育者が一緒に伴走することで、一人のやりたいがクラスに広がっていく面白さを感じた。これが水谷先生が初めに言っていた「楽しいことをしていると、子ども達は集まってくる。その中で子ども達の話合いが始まる」ということなのかもしれない。子ども達が主体的に学ぶという中で、「それでは保育者の役割は何なのか。」という問いがいつも出てくる。水谷先生は子ども達に伴走しつつも、子ども達に提案して

いる姿があった。上からの「～しましょう」ではなく、子ども達と同じ目線(フラットな立場)で提案という感じなのだ。また、今回の話の中で「子どもから学ぶとは、何でもかんでも子どもに委ねることではない」という言葉が何回も出てきた。子どもの「やりたい」ということだけに行き当たりばったりで活動をするのではなく、目の前の子どもの姿から何が次につながるのか。子ども達は何を欲しているのか。それを見取る、聞きとる力が保育者、大人に求められているのだと思う。それも子ども達のやりたいを叶えるというだけが目的やねらいではない。渡邊久暢先生が「子ども主語の学びや授業を追求するからこそ、教師主語の指導も大切なのではないか。」と言われた意味は、「子ども達の『やりたい』の先に何が見えるのか。そのねらいは何になるのか。その先に行くために私たち保育者は、どのような環境を準備しなければならないのか。子ども達の姿をただ待っているのではなく、保育者の緩やかな願いに対して(もちろん、思っている願いとは違う方向へいくこともあるが)どのようなタイミングで声をかけ、共に関わっていくのか。」と問われたような気がした。しかし、この子どもの見取りも、一人の保育者だけがやっているのでは、保育は広がってはいかない。こども園の職員が、チームとなっていく事が必要になってくる。

玉ノ江こども園では、子ども達の思いをどこまで拾い上げ、受け止めていけるのか。私も含め保育者は、まだまだ芯となる根っこのようなものがぶれぶれの状態である。「あれが出来ていない。これも出来ていない。」と出来ていないところばかりに目がいつてしまう私だが、先日の公開保育後に宮本先生から「出来ていないところに目を向けるのではなく、玉ノ江こども園の良い所(プラスの面)に目を向けていく必要がある」と言われた。この言葉を大切にして、保育者一人ひとりの素敵な所を見つけ、そこから保育者自身が主体的に動き、考えることが出来るチームになればと思う。

# つながりと対話から生まれるもの

学校改革マネジメントコース 2年/岐阜市立加納中学校 今井 良昌

1日目午前の特別フォーラムでは、特に社北小学校の水野校長先生の話が印象的であった。語り合い・学び合いを促す校内研修という話であったが、今年度の私の校務分掌が研修主事であるため、自身の実践と重ね合わせながら聞いているうちに、自分もこんなことやあんなことをやりたいというインスピレーションが湧き上がってきた。早速、そのアイデアを夏休みの研修やそれ以降の研修について、短期と長期の視点で見直すことにして、動き出した。

午後のラウンドテーブルでは、2月のラウンドテーブルのZone Eで、本校生徒と交流したという金津中学校の齋藤先生と一緒することになり、偶然にびっくりもした。

SMの金田さんからは、伝統に着目しながら、なぜその学びや活動が必要なのかという問いをもち、子どもたちの主体的な学びを生み出すための試行錯誤の過程についての報告を聞いた。合唱などの行事はあくまで手段であり、ただ伝統だからと踏襲するのではなく、その活動を行うことで何をどのように学び、どんな力を身に付けることができるのか、そこに立ち返らねばならないことに改めて気付かせてもらった。

羽水高校の片桐さんの報告からは、高校の国語科の授業でも探究的な学びができるという貴重な実践を知ることができた。国語科という教科は、言葉の扱い方を学ぶ教科ゆえ、指導事項が規定されており、探究的な学びが難しいという印象があった。しかし、生徒自ら問いを立てることで、見通しをもち、主体的に小説教材と向き合い、「問いかけ」によって生徒の学びが生み出され、試行錯誤しながら見事なレポートが作成されており、単元を通して資質・能力を身に付けることができていることが報告されていた。主体者意識を大切にしていきたい、本校の研究にも大いに参考にしたい実践であり、ラウンドテーブル後に、国語科の同僚に即座に報告してしまった。

他者の実践を聞き、自身の実践を語ることで、今回も自分の取り組みを後押しする力をもらったかのよ

うな思いになった。新たなアイデアも湧き出し、やってみてみたいという前向きな気持ちになることができた。これこそが、語り合うプロセスの意義であることを今回も実感した。

2日目のセッションでは、今回もZone Eに参加した。今回はオンラインによる開催ということだったので、岐阜に戻り加納中学校の教室から接続して参加した。岐阜でも参加できるということで、今回も生徒を参加させたいと思い、生徒会役員を中心に声をかけ、生徒会長をはじめとする3名の生徒とともに参加した。

Zone Eでは、大人も子どもも、住む場所も違う色々な人が共に語り合い、今まであまり考えなかったことや、当たり前前に思っていたことに、疑問をもち考えていく過程が、新たな気付きを生み出す刺激的な学びの場であると感じ、これで3回目の参加となったが、今回も楽しませてもらった。とはいえ、オンラインでの交流でファシリテーターを行う経験はあまりなく、対面で対話をする時とはまた違った脳みそを使っている感じがして、うまくできたかはともかく、よい経験をさせてもらった。

今回のセッションでは、16年後、25年後に、自分の力で叶えたい願い事を出し合うことで、アイスブレイクを行い、その願い事を叶える大事なチカラとは何だろうということを考え、交流しながらまとめていくという活動を行った。その活動を通して私たちのグループで出てきた力が、「共生する力」、「多様性を認める力」、「自分を尊重する力」、「折り合いをつける力」、「協働する力」、「行動に移す力」、「疑問をもつ力」の7つであった。自分と他者との関係にかかわるチカラについての話題が若者から多く上がったのも、興味深かった。やはり人とのつながりの中で幸せに生きることが大切だと改めて思った。

最後に、今回セッションに参加した本校生徒3人とも他地域、異年齢の人と交流した経験に大いに刺激を受けたようであった。セッション翌日の昼の放送で、全校生徒に今回の体験を早速報告したことに

については、その実行力と伝えたいと思わせた対話の力に驚いた。人とつながり、対話を通して語り学ぶよさが、こうやって広がっていくのだと感じた。

## ラウンドテーブル クロスセッションの学び

長野県総合教育センター 専門主事 久保田 美千代

「あなたは、ラウンドテーブルを人生の節目としている」という思いがけない言葉をいただいた。一瞬の戸惑いのあとに、すぐに納得した。確かに今の私にとって、実践研究福井ラウンドテーブルは、「年に2回、必ず参加するもの」になっている。ラウンドテーブルが、私の学習者としての「観」を更新するきっかけとなり、現在の実践につながっている。

私は、長野県総合教育センターで現場の先生向けの研修講座を企画、運営している。「この研修講座を受講しよう」と希望し、一日学校をあけて総合教育センターまで足を運んでくださる先生方に向けて、研修講座において、受講者の先生方が探究的に学ぶことができるようにと日々考えている。したがって、今回のクロスセッションについても、「教師の学び」「探究的な学び」の2点から振り返ってみたい。

教職大学院2年生のSさんは、インターン先の高等学校での授業実践と生徒との関わりについて語ってくださいました。インターンとして高校3年生と関わる中で、「生徒は、自ら進む力をもっている。だから、生徒が進む力を少し後押しできる存在になりたい。生徒にとっての休憩場所でありたい。」そんな考えに至ったと話された。生徒から学んだことが多かったとのことであったが、聴き手からの問い返しの中で、生徒から学んだことだけでなく、担任の先生の姿もSさんに大きな影響を与えていたことが見えてきた。その担任の先生の生徒理解が深いことを感じるにつれ、Sさんの担任の先生への印象も変化していったことが伺えた。やはり、教師の学びを支えるのは、生徒の姿と職員集団なのだろうと感じた。

東京都教育庁のN先生は、前任の中学校での実践を話してくださいました。校内研究を実践コミュニティで進めたという実践は大変興味深かった。副校長で

あったN先生が、意図をもってコアメンバーとなる教員を指名し、コアメンバー一人一人の小さなつづやきが研究の推進力となったことが伺えた。N先生の語りからは、「先生方が自ら問いをもち、その解決のために協働していく姿」が見えてきた。N先生の学校では、教師が探究的に学んでいったのだと感じた。探究的に学ぶために、自ら問いをもつことが大切なのだと再確認した。

私は、今回のクロスセッションで「探究的な学びをデザインする」というタイトルのもと、自身の実践をお伝えした。私は、どの研修講座でも、まずは学び手が自身と向き合う時間を設定している。立ち止まり、自分の実践を振り返る。その中で改めて見えてきたことを語り合う。学びを深めるために、資料を読んだり体験をしたりし、感じたことをグループで語り合う。他者との語りの中で、更に見えてきたことを書き留める。そんな研修講座運営に取り組んでいることをお伝えした。

聴き手として参加されていたFさんは、一般企業で広まっている職場の「フリーアドレス」を話題にあげてくださいました。私の語りに対してお伝えくださった「フリーアドレス」について、これまで、自身の実践に取り入れようと考えていなかったが、Fさんの言葉をお聞きしているうちに、研修講座においても参考にできると感じた。研修講座受講者のグルーピングは意図をもって仕組んでいる。しかし、私が受講者一人一人の座席まで指定することの意味はあったのだろうか。グループ内の座席をフリーにすることで、ほんの少し、受講者に選択肢が生まれ、そこから受講者同士のつながりが深まることもあるのかもしれない。

ラウンドテーブルの1週間後に実施した研修講座で、私は早速グループ内の座席を「フリーアドレス」とした。研修講座では、開講式前は沈黙が続くことが多いが、この日は、自然と受講者同士の会話が生まれていた。これは、座席を指定しなかったことだけが理由ではないと思うが、Fさんの言葉から、私の実践に幅ができたように感じる。

クロスセッションでの報告に向け、半年に一度、自身の実践を振り返り書く。異校種、異業種の、初対面

の方に伝わるように言葉を付け足しながら語る。グループの方々から、自分の無自覚だった部分を問いかける。視野が広がる。自身の軸が見えてくる。自分の知らない地で、自分と同じように日々奮闘している人たちがいることを知る。それらが、明日からの活力となる。そんなラウンドテーブルが、私の教職人生の節目となっている。

## Zone A 学校

### 子どもの主体的な学び—連続性のあるコミュニティ—

ラウンドテーブル2日目(7月7日)午前は、Zone A「学校」に参加の機会を得た。主体的・対話的で深い学びを問うこのZone Aに初めて参加したのは、特に「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」をテーマとしていることに強い関心を持ったからである。関心を向けた「コミュニティ」は地域社会をイメージしたものであったが、学校がどのような場であるべきかを問い直すことができた。

ご報告があったこども園と中学校の取り組みは、それぞれの成長・発達段階にある子どもと教員がインタラクティブに関わり合い、学びをともに作り上げていく大変興味深い内容であった。こども園での実践では、子どもたちの関心が予想を超えて広がることに寄り添い、さらに好奇心から生じる反応を教員が受容し、次に必要になるものをマッピングを使いながら教員間で共有化して検討していることが分かった。また、中学校では英語学習のなかで、教員は見通しを持ちながらも、授業の進め方を生徒と共に検討しよりよい学習を創り上げていく様子が印象的であった。また研究集会をとおして教員間で実践が共有され、省察を繰り返しながらよい学びの土壌を作っている様子も知った。

いずれの実践も、学校(こども園・中学校)は子どもたちの学びと成長を支える共同体=コミュニティと

#### 富山大学教育学部 准教授 志賀 文哉

して、なくてはならないものとして機能していると理解した。

このような理想的なコミュニティが維持されるためには、異校種間の連携・接続が大事になるのではないかと報告のあった中学校は義務教育学校であり、基本的に小中9年間の教育が連続しており、学校園として前期課程と後期課程のつながりがある。このことが、学習環境として生徒の主体的な態度を育む雰囲気を作り出しているのではないかと推察される。このことについて、小グループに分かれての分科会で「義務教育学校のメリット・強み」ではないかと発言した。呼応として、小・中が連続性をもち、子どもらが安心できる環境にあることが確認できた。小学校・中学校という区別は、隔たりのあるものと見えやすいが、前期課程・後期課程として経験していく児童生徒にとっては、それが初めてであり、いわば当たり前のもので受け入れられ、一体感のある学習環境となっているのではないかと推察される。その中で、寛容的な雰囲気の中で主体的に学ぶ姿勢が涵養されていくといえるのではないかと推察される。

もしそうであるならば、義務教育学校のような環境は私立の一貫教育には同様のものがあるが、公立の異校種ではどうすればよいかを考えてみる必要がある。幼小・小中・中高などの接続を議論する中で、こうした主体的な学びを継続するには、就学前から



始まる「一つの学びのコミュニティ」を形成する共通のビジョンを持ち連携していくことが大事になるといえる。

分科会では、参加者の実践が共有された。紙幅が尽き、それらすべてに言及できないが、意見交換の中に

あった、子どもの感情の変化を敏感に捉え、「主体的になっていく」子どもに寄り添うことが大切であることは、異校種間で共有化されるべきことのひとつであろう。

## 子どもから学ぶ

### 福井県幼児教育支援センター 坂ノ上 忍

私が参加した Zone A は、子どもたちが主体的に学びを深めていくために、学校や園が、どのように子どもたちを支えていくことができるのかを「子どもから学ぶプロセス」を視点に探っていく内容だった。

一人目のシンポジスト、きたこども園の水谷先生は、昨年度、福井県幼児教育支援センター主催の園内リーダー養成研修を受講され、今回、その研修内で書き綴ってこられた実践事例を基に報告して下さった。水谷先生は保育の中で、子どもの思いを大事にし、やってみたいことにとことん付き合い、子どもの発想や言動の一つひとつに感動しながら子どもの遊びに丁寧に関わっている。また、日常の活動として、子どもの姿から自分たちの保育を同僚と共に振り返り、保育者としてどのような援助や環境構成ができるかの話し合いを行っている。これは、『子どもの声や姿を真摯にとらえて、常に子どもから学ぶ姿勢をもち、教師として何が自分自身に問い続ける』教師として大事な保育観や指導観であると思う。私が10年前に幼児教育に携わったときから、幼児教育にとっても魅力を感じているのは、この保育観や指導観を知ることができたからである。水谷先生の園の子どもたちは、教師が想像する以上の力を発揮しながら、遊びの中の学びを深めている。今回、水谷先生から、教師が持ち続けなければならない大事な観について改めて学ぶことができた。

二人目のシンポジスト、福井大学附属義務教育学校の河合先生は、6月14日に行われた教育研究集会

の内容も含めて実践報告をして下さった。私は、教育研修集会に参加していたので、あの日の感動を思い出しながら聴くことができた。附属義務教育学校で実践している「子どもと共に学びを語る」ことは、これまでの私の授業観や指導観にはなかったものだった。教師と子どもが「教える-教えられる」の関係から「共に学んでいく」関係へ転換されることによって、学校が、双方にとって居心地の良い場所になるということ、河合先生の報告を聴いて学ぶことができた。実は、6月14日に後期課程の授業を参観したとき、私は9年ぶりに、中学3年生になったAさんの姿を見ることができた。私は、Aさんが5歳のとき、彼女の担任をしていた。この日のAさんは、友達と一緒に考えたやり方で数学の課題を解決しようと、教室ではなく階段で実験を行い、試行錯誤を繰り返していた。うまく結果が出なかったので、友達と何度も意見を交わし、粘り強く挑戦していた。その姿は、9年前、幼稚園で自分の好きな遊びに真っ直ぐ向かっているAさんの姿と同じだった。私は、Aさんたちが、学校の中で自己発揮しながら、主体的に学びを深めていくことができていることにとっても感動した。

今回のラウンドテーブルに参加して、私は、自分自身の様々な観を見つめ直すことができた。『子どもたちが主体的に学びを深めていくために何ができるのか。』今後も、子どもから学ぶことを意識し、模索していきたいと思う。

## Zone B 教師教育

# キーワード「対話」から生まれた考え方 $A+B=Z$

福井県福井市宝永小学校(埼玉県からの県外派遣) 教諭 高澤 和宏

生徒が「対話が下手になったと言う」実践報告が始まってからすぐに出た報告者からの一言で始まった、初めてのラウンドテーブル。私は埼玉県からの福井県への県外派遣研修として、福井市内の小学校に勤務しながらラウンドテーブルに参加している。

実践報告者の一言から、その日グループを組んだメンバーのそれぞれの考えが飛び交う。「対話が下手になることはないんじゃないか」「形式的な対話だとありえるのかもしれない」そのとき私が考えていたことはラウンドテーブルに参加する前の気持ちであった。「ラウンドテーブル緊張するな。何話していいかわからない」もしかしたら、その時の生徒も同じようなことを考えていたのではないかと。論点と合っているかわからなかったが、考えたことを素直にぶつけてみた。突拍子もないことだったかもしれないが、グループのメンバーは頷きながら私の考えを受け入れてくれた。そのことが何よりも嬉しかった。そういえば、ラウンドテーブルの初めに福井大学教職大学院森田先生が、「聞き手の人の受け入れ方がとても重要である」という言葉を思い出した。どんな考えでも受け入れてもらえることで、「また話そう！対話楽しい！」となっている自分がいた。まさにこの経験が大切であるとラウンドテーブルを通して体験することができた。今までの私は心のどこかで「対話をせずに一人でやった方が早い」「今までと一緒のことをやっていたらいい」と考えていたのは事実である。そうい

った考え方を見つめ直すきっかけになることも、ラウンドテーブルの魅力の1つであると感じている。特に指摘されているわけではなく、自分で気付く、見つめ直すからこそ、より印象に残り、自分の考えとして構築されていくのだと考えることができた。対話が盛り上がる中で、「Aの考え、Bの考えの人が対話することでZという考えが生まれることはありませんか」私は大きく頷いた。まさしくその通りだと思ったし、対話の素晴らしさとはまさに、「 $A+B=Z$ 」になることも1つだと気付くことができた。この対話の素晴らしさを「児童に味わってもらわないわけにはいかない！」その時にグループの全員が大きく頷いた瞬間であった。

ラウンドテーブルの後半になってくると、対話を通して自分自身の中にも変化が表れていた。「今までボヤッとしていた考えが自分の中で整理され、いつの間にか腑に落ちる瞬間がやってくる」この瞬間がいつ訪れるかわからないが、この瞬間に期待してまた、ラウンドテーブルに参加している自分がいるはずだ。

いつの間にかラウンドテーブルの虜になっている。対話を通して自分自身が考えていたことを語ることで、今まで見えてこなかった光景が見えてきて、それがその方にとって意味のある語りになる。 $A+B=Z$ に出会えるのが今から楽しみである。

## 組織を活性化させる対話

葛飾区立常盤中学校 校長 平岡 栄一

今回のラウンドテーブルはZone B 教師教育に参加した。

まず山形大学教職大学院からの情報提供があった。同大学院では県教委と各学校が連携して2つのプロジェクトを運営している。

1つ目は「教職の魅力創造プロジェクト」で、「未来の教師となる高校生、教師を目指す大学生、現職教員が学びや教育について根源的に学び合う場をつくること」を目指している。現職教師、大学生、高校生が語り合う学びフォーラム、高校生、大学生

の教員体験セミナー、大学生と教員が対話する恩師聞き書きという3つの大きな活動がある。

なぜ私たちは学ぶのか、本当の学びはどうあるべきか等を、教師と教育委員会だけで対話するならばその成果は予測の範囲内だろう。しかし、高校生や大学生と共に語るとなると、建前は通用せず、本音で語り、教師はそれまでに至らなかった気づきを得ることができ、高校生や大学生は教職について理解を深め、その魅力に気づくだろう。

2つ目は「学校マネジメント講座」である。これは研修の場の中心を「実践の場」である学校として、センターは「考えを整理し大学教員や受講仲間とアイデアを協働生成する場」と位置づける。この方式は時間的に無理がない。日々の実践の場、活動の中心が学校であるならば、安心して思い切り活動ができ、すぐに振り返りができる。さらにセンター研修で「対話」を多く行い、他者の考えを取り入れ、省察して次の実践につなげていくなれば大きく力を高めることができる。

また福井県教育庁嶺南教育事務所からの情報提供もあった。内容は教員育成の施策、校内研修支援、校長同士が学び合うオンライン研修、ふるさと学習推進プロジェクト、福井大学嶺南地域教育プログラムの5つであった。

そのうち独自の取組として、R-Café(校長用)、r-Café(初任者用)があり、「お茶を片手に気楽に参加できて、特定の成果を求めないゆるーい語り合いの場、時にはお悩み相談も」がコンセプトでオンラインで実施される。校長用は年間20回の実施で、希望する回にのみ参加すれば良い。テーマ例として、第1回「まだ間に合う年度当初の校長業務」、第8回「人事評価」、第11回「学校外部との協働ネットワークの構築」、第20回「次年度に向けた学校経営ビジョン」と時期に応じて必要なテーマが用意

されている。また一方的に聞くのではなく、自分の考えをもって参加し、参加者同士で学び合い、納得解をさがす研修と位置付けられている。

そしてふるさと学習推進プロジェクトは、探究的な学びに関する教員同士の学び合いの場として、福井大学の教員、学生が参加して実践発表の交流の場となることが意図されている。

この今回の両者の情報提供では、両組織とも詳細な計画で受講者の便宜を図っており、参加者は増加し、学びも深くなるといった。

教職大学院や各教育委員会等においては、このように様々な取組が進められているところであるが、各校や各地域等における教師教育の実践コミュニティも同様に大変重要である。

自分が関わる実践コミュニティについては、ラウンドテーブル方式を活用して「対話」が存分に行われて参加者の力を大いに高めていると感じている。校内研修はもちろん、自身が会長である東京都中学校清和会(東京都中学校管理職から教諭まで約600名が所属)、東京都中学校英語教育研究会(約1800名が所属)において活発な研修が実施されている。

その一方で、定例校長会、校長連絡協議会、都教委や区教委が主催する委員会等をもっと学びや成果に直結させたいという思いがある。

こうした会議では、提案者から何をしたいか、なぜしたいかというメッセージがほしいがそれらが提示されることは稀で、また矛盾の指摘や改善の提案は歓迎されない。考えたり議論するのは大変だから、これで承認してほしいとも感じられる。ここに「対話」を取り入れて、多くの学びやウェルビーイングにつなげることは果たしてできるのか? 公式の会議や協議会でも「対話」が生まれ、新たな気づきにつながれば組織はさらに活性化するのだと思う。

## 「魅力ある教職」であるために

### 山梨県総合教育センター 平沼 公香

この度、初めて実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただきました。自身が所属する教育センターでは、「新たな教師の学び」を支える研修の在り方や方向性を模索しています。求められる「研修観の転換」に向け、私たちはどのような場を創っていけばよいのか、検討しているところです。今回のラウン

ドテーブルへの参加で、様々な気づきが得られました。

【山形大学教職大学院の実践】教員養成・教員育成についての提案で印象に残ったのは「教職の魅力創造プロジェクト」で、高校生・大学生・現場教員・管理職・大学教員・県教委が一緒に語り合う場があることでした。また、多忙な日常の中で、学びたくても学

べない先生方への支援もありました。研修において新たな知見や情報を得ることに留まらず、各自がもつ課題を明確にし、探究的な意識で参加することにより「解決のきっかけとなる研修」へと意識を転換していくことの必要性も話題になりました。

さらに、学校の「学びが自走する」ために、どんな研修や研究支援であればよいのか、考える時間となりました。“答えは学校にある”というコメントに、常に自校の課題を意識し、解決方法を探ろうと実践を重ねる教師集団でありたいと改めて感じました。しかし、働き方改革の下、毎日の業務に追われてじっくりと課題に向かうことが難しいのも現実です。管理職が舵を切るのに戸惑う状況も散見されるなか、どのような支援ができるのか、「学校改革マネジメント講座」の提案には、新たな視点をいただきました。

【福井県教育庁嶺南教育事務所の実践】教師個人の資質向上はもとより、学校としてよりよい教育活動を推進するために、学校同士の学び合いの場や校長同士が学びあう自由参加の場の設定に、他県の教育事務所と連携する研修を組まれていることが印象

的でした。また、改めて“学びの相似形”を考えたとき、経験年数の浅い先生方の割合が増えている学校現場で、いかに校内研修の質を高めていくのか課題ですが、大学や学生が参画するプログラムがあるなど、研修や校内研修支援の在り方のヒントをいただきました。

教育行政機関としての教員育成の方策が、教師の「個別最適な学び・協働的な学び」となり、自主参加型の探究的な研修体系へと転換していくことについては、多くの示唆をいただきました。

教員養成も、教員育成も、課題解決の共通項は「魅力ある教職」であることだと改めて感じました。子どもたちから、如何に学校の先生という職業に憧れをもってもらえるのか。一番は、子どもたちとともにある教師が、やり甲斐を感じながら生き生きと働く姿を見せられるかどうかではないでしょうか。教育行政や教職大学院の連携を生かし、教師一人一人が主体的に探究する連続した学びを展開していき、学校文化の一つとして高め合える教師集団を創ることを目指していきたいと思います。

## Zone C コミュニティ

### 揺らぎ、伸び縮みするコミュニティ

福井県立羽水高等学校 教諭 片桐 聡子

「地域の課題解決って言うけど、教員も地域の中にはいるはずでは？」昨年度一年間、生徒の探究学習に伴走してきて最もどきりとした言葉だ。生徒たちが向き合っている地域コミュニティの中で、自分がどこにいるのか、どこにいたいのか、それを考えてみたいと思い、Zone Cに参加した。

1人目の報告者・半田智咲さんは、かねてより一度話を聞いてみたいと思っていた方だ。中学校の「総合的な学習の時間」で取り組んだまちづくり活動の校内コンペで落選した悔しさや、活動そのものの楽しさを原動力に、高校では「学生まちづくり班」等に参加したとのことだった。率直に「自分中心でいいな」と感じた。若者、特に学生がまちづくりに精力的に取り組むと「〇〇のためにありがとう」「〇〇のために偉いね」と自己犠牲的な文脈で評価されることが

多々あると個人的に思う。自分が楽しくて始めた活動が、いつの間にか周囲からの期待に応えるための活動になってしまうような悲劇を避けるには、自分の中に軸を持つことが重要であると改めて分かった。

2人目の報告者・川崎耕介さんは、今回のテーマである「コミュニティの意義」を常に問い続けている方だと感じた。既存の伝統を引き継いで守るだけでなく、新たな取り組みを通じてコミュニティへの新規参入者が認められる場所があることが重要だと熱く語っていた。川崎さん自身は「世界の有機的な広がりや移ろいを感じるのが好きだから、それらを感じて生きている意味のようなものを感じてほしい」という思いが活動の原動力になっているということだ。日頃教育者として子どもたちと関わり、地域の中では様々な世代の人々を繋いでいるからこそ出てく

る言葉だと思った。また、今は自分の中でコミュニティが価値付けできていたとしても、未来は分からないから省察していくことが大切だ、という川崎さんの考えに深く納得した。

報告を踏まえた小グループでの話し合いでは、公民館主事、能登半島地震被災者、農村集落区長……といった多様な立場の人々と共にコミュニティの意義について語り合った。すべてのコミュニティに共通している点として「揺さぶられている」という言葉が浮かんできた。人口減少や自然災害、生活様式や価値観の変化によって従来のコミュニティの在り方が揺らぎ、その変化をネガティブに捉える人がある反面、新たな創造のチャンスだと捉える人もいる。そしてコミ

ュニティに参加する人自身の中や、その姿を目にした人の中でも、価値観や人生観に揺らぎが生じていくのだろうと考えた。

今回の参加を経て、Zone Cのタイトルにある「持続可能なコミュニティをコーディネートする」ことに関し、私は自分を中心にありとあらゆるコミュニティが「伸び縮み」しながら繋がり続けるような向き合い方を目指そうという意識が生まれた。自分のライフステージや価値観に応じて、特定のコミュニティの中にどっぷり浸かって活動を拡張することもあれば、活動が縮小してコミュニティの外から僅かな繋がりを保ち続けることもある、そんな在り方を自分なりに模索していきたい。

## Zone Cに参加して

### 福井市中央公民館 主事 半田 実紀

私が参加したゾーンCはこぢんまりとした何となく温かい雰囲気の中オンライン上で行われました。お顔を拝見したことのある方、初めての方、、、様々な参加者がいらっしゃいますが、いつ来ても富永先生の楽しいファシリテーターで時間があっという間に進んでいくように感じました。今回は大きなテーマが「コミュニティと私」「私にとってのコミュニティ」でした。コミュニティとはあまり意識したことがないため改めて考える時間をもらったことに感謝しつつ、娘も一緒に参加していたところから少し振り返りをしたいなと思い原稿を書かせていただくこととなりました。

コミュニティとは人それぞれのライフスタイルやTPOによって変わるものと感じます。一瞬にしてできあがるもの、じわじわとできるあがるもの、、、様々な形がありますが、小グループと全体での皆さんのお話を聞き、「コミュニティは生き物」という言葉が本当にぴったりくるなと感じました。生き物だから、1人1人が「帰れる場所」として成り立っていくことが望まれるのかと感じます。コミュニティとの関わりや存在はその人それぞれであり、強制するものではないと改めてそう感じております。

私にとってのコミュニティとは、空気のように循環していくものと考えます。生きていく上では空気は必要不可欠なものです。それと同じくらい必要なものでは？と思います。コミュニティの成り立ちは人が先？環境が先？とも考えると環境があってできあがってくるのではとも考えますが、逆のパターンも考えられますのでそのあたりはケースバイケースなんだと思いました。

年齢関係なく一人ひとりがコミュニティを自ら取捨選択しつつ、それぞれのコミュニティは閉鎖的ではなく開放的でいつでもウエルカムですよ～！という場所の提供があれば参加しやすく、一時的なもので終わることなく半永久的に続いていくものと成長していくのかもしれませんが、地域・学校・職場、、、様々な環境がそれぞれにあると思いますが、そこで自分自身をどうするかは自分自身が決めることであり、自分が関わっているすべての場所のコミュニティでかかわりを持たないといけないということではないと感じます。今回のゾーンCも、オンラインの良さを活かしつつ、ハイブリット形式で行えることがあればこの先も続いていけるのかなと感じました。

皆さんの話を聞きながら、自分にとってのコミュニティとは喜びを共有でき、刺激し合える場と感じます。自ら開拓する人、必要とされ進んでいく人、立ち寄り居心地がよかったからの人、何かを始めようとしたことから始まった人、、、人それぞれのスタートがあります。私も娘も形は違いますがそれぞれ

のコミュニティを持っています。表で活躍する人がいるから裏で活躍ができる、外で活動するために内で支える人がいる。お互いがお互いに支え合い関わられる環境があればコミュニティはしんどくなく楽しい思いで続いていくのではと感じました。

## Zone D International

# A REFLECTION ON THE 2024 LESSON STUDY ROUND TABLE DISCUSSION HELD AT THE UNIVERSITY OF FUKUI IN JAPAN ON 6TH JULY, 2024

Nalikule College of Education (NCE) **Richard Ngwira**

On the 6th of July 2024, I had an opportunity to attend the Roundtable discussion which was organized by the University of Fukui in Japan. It was a great experience since I was given a chance to connect with some individuals from different countries with whom we shared our experiences.

The first person to present her experience was Laurine Nichole Hartford from Florida in the United States of America, working as an Assistant Language Teacher (ALT) in Japan. She talked about her background for her to become a teacher and her experience as an educator. In her presentation, she explained that despite her mother being a teacher, she had no passion to become a teacher as such she wanted to become a Defense Attorney, but eventually became a teacher. She also explained her passion in education and believed that “A good education is a foundation for a better future,” a quote from Elizabeth Warren. She also emphasized the importance of proper preparation in lesson delivery. She highlighted that the level of fear is inversely proportional to preparation. I was inspired by her passion for teaching. I learnt that the challenges she has gone through were just similar to what we have also gone through in our educational life.

I presented my experience as educator and based on our visit in Japan. It was a great experience to learn about the Japanese education system which emphasizes inquiry-based learning.

Learners are exposed to research projects while still young. The relationship between the University of Fukui and its attached school was pleasing. From the experience, we realized that at the Nalikule College of Education, we are under-utilizing the Nalikule Demonstration Secondary School. As such, it is something that we can learn to improve the situation as a way of enhancing the professional development of our teachers and even the student teachers that we train. I also had an opportunity to tell our friends from other countries that Malawi is another place which is peaceful and has many places of tourist attractions which are worth visiting. I noted that all these are in line with Malawi’s vision of turning the country into an inclusively wealthy and safe, reliant nation by the year 2063. This could enhance the production of a properly trained human resource that could positively contribute to the national agenda.

I would like to express my appreciation for the idea of having the roundtables. Firstly, they provide us with the chance to hear from our fellow educators and be inspired by their experiences and challenges. Listening to others’ difficulties can be encouraging, as it reminds us that we are not alone in facing obstacles. Furthermore, roundtables offer an opportunity to recognize and appreciate our own work which we might not realize are already quite commendable.

2024年7月6日、私は日本の福井大学が主催したラウンドテーブルに参加する機会を得ました。さまざまな国の人たちと交流し、経験を共有できたのは素晴らしい経験でした。

最初に自身の経験を発表したのは、アメリカ合衆国フロリダ州出身で、日本で外国語指導助手（ALT）として働いているローリン・ニコル・ハートフォードさんでした。彼女は教師になった経緯と教育者としての経験について話しました。プレゼンテーションの中で、彼女は母親が教師であるにもかかわらず、教師になりたいという情熱はなく、弁護士になりたかったが、最終的には教師になったと説明しました。また、教育に対する情熱について説明し、エリザベス・ウォーレンの「良い教育はより良い未来の基盤である」言葉を信じていました。また、授業を行う際には適切な準備が重要であると強調しました。彼女は、恐怖のレベルは準備に反比例することを強調しました。私は彼女の教育に対する情熱に感銘を受けました。彼女が経験した困難は、私たちも教育生活で経験してきたこととまったく同じだと知りました。

私は教育者としての経験と日本訪問に基づいて発表しました。探究型学習を重視する日本の教育システムについて学ぶことができたのは素晴らしい経験でした。学習者は幼い頃から研究プロジェクトに触

れます。福井大学とその附属学校の関係は素晴らしいものでした。この経験から、ナリクレ教員養成大学ではナリクレ附属中学校を十分に活用していないことに気づきました。つまり、附属との協力関係は私たちが学ぶべきことであり、教師や私たちが訓練する教育実習生の専門能力開発を強化する方法として重要と考えられます。また、マラウイは平和で、訪れる価値のある観光スポットがたくさんある場所であることを他の国の友人に伝える機会もありました。これらすべては、2063年までに国を包括的に豊かで安全で信頼できる国にするというマラウイのビジョンと一致していると指摘しました。これにより、国の課題に積極的に貢献できる、適切に訓練された人材の育成が促進される可能性があります。

ラウンドテーブルに参加する機会をいただいたことに感謝の意を表したいと思います。まず、ラウンドテーブルでは、他の教育者の話を聞き、彼らの経験や課題から刺激を受ける機会を与えてくれます。他の人の困難を聞くことは、障害に直面しているのは自分たちだけではないことを思い出させてくれ、励みになります。さらに、ラウンドテーブルは、すでにかなり称賛に値することに気づいていないかもしれない自分たちの仕事を認識し、評価する機会を与えてくれます。



## 7 月 月 間 合 同 カ ン ファ レ ン ス 報 告

### 「元気になる」カンファレンス

学校改革マネジメントコース2年/袖ヶ浦市立長浦小学校 犬塚 晶子

「東京サテライトのカンファレンスにくると、元気になるよ。」これは、東京サテライトラウンドテーブルの参加した時に、聞いた言葉です。校務多忙で、1日の勤務時間が12時間を超えることがあり、たくさんの行事や生徒指導に追われ自分を見失いそうになるほど忙しく過ごしているのは、私だけではないと思います。「みんな忙しい」という合い言葉のもと

毎日勤務し、そしてむかえた7月カンファレンス。冒頭の言葉通り確かに、今7月に月間カンファレンスを終えて、すがすがしさ、あたたかさ、そして確かな学び終え「元気」になって自宅に戻りました。自宅から、カンファレンス会場まで約2時間、不思議と1度もつらいと思ったことがないのです。それどころか、楽しみでならないのです。

今年で2年目となった、教職員大学院での学びも昨年とは異なり、少しずつではありますが答えが見つけれられるようになってきました。7月のカンファレンスで、7月6日(土)に行われたラウンドテーブルの学びをふりかえりました。自分の実践発表の時に、ご意見いただき悩んでいたことを話すと、同じグループの院生のみなさんが、自分事のように本気で考えてくださったり、活発な意見交換をしたりと自分の実践の良かった点や課題を見つけることができました。ファシリテーターの福島昌子先生が、みなさんの意見交換から、事例を挙げながら理論づけてくださり、私自身が今後の方向性を意思決定する、糸口をたくさん提示してくださいました。単なる井戸端会議ではなく、実践を理論と結びつけ、感情に流されることなく解決方法を導き出せたのです。

日々の実践の中で、たくさん意思決定を行いながら教育活動をしています。月間カンファレンスは、その意思決定の土台となっていることを実感しています。7月のカンファレンスで、3人の先生の資料を読ませていただきました。中でも小林真由美先生の「意義ある研修の在り方を探る」は、今の私にぴったりの資料でした。私の心に刺さった文章は以下の通りです。

今になると容易にわかることだが、そうしたマニュアル本に走れば、そのルールに子どもたちをむりやり乗せようとする。マニュアルを掴んだと思う頃には、私は子どもに目が行かなくなり、ブラックボックスのように何かを入れれば、必ず何かが出てくることを期待するようになって、そのボックスの中は見ようとしなくなっていた。

私の悩みの種は同僚教師で、まさに小林先生の文章の状態にあり、4月に比べるとだんだん表情が暗くなってきました。その先生は独自の経験則やいわゆる世の中に出版されている「How to本」からの実践を好み、学級経営に導入していたのです。最初のうちは児童も新しい仕組みを楽しんでいたようにみえましたが、その学級では6月ごろから毎日いくつかのトラブルが起き、解決できないことが多くなってきました。私自身も、学級経営に自信があるわけではありません。いつも自分が児童に投げかけた言葉は、

「どう伝わったか」が気になり、児童や保護者とたくさん対話することから、解決の糸口を見つけようと必死です。児童の日々の様子を観察し、ノートやワークシートと真剣に向きあい、児童を理解しよりよい学級経営に向けて努力をしています。もちろん、「How to本」は大変魅力的です。しかし、小林先生の文章の通り子どもに目がいかなくなると、うまくいなくなる危険性があるのです。管理職を目指す立場となり、「How to」だけでは・・・という考えは持てるようになりましたが、実際になぜ「How to」だけでは、うまくいかないのか、理論と事例そして国や様々な研究機関から発行される文書・論文・書籍・先行研究をもとに、自分の目の前の子どもの教育活動について、考え研究するカンファレンスこそ、福井大学教職大学院のカリキュラムの素晴らしさであると実感しています。そして、答えは子どもの数だけあり、先生の数だけあり、保護者の数だけあることが、わかりました。「How to」から「What to do」にしなければならぬとカンファレンスで同じグループになった先生がわかりやすくアドバイスくださいました。そして、答えはアップデートしていかなければならないこともカンファレンスで学びました。

1年目は、みなさんの話が聞けて「楽しい」とカンファレンスに通っていました。東京サテライトの院生さんや福井先生方はみんなあたたかく、心理的安全性が十分に保たれたコミュニティで、自分の悩みや探究したいことを言い合え、学べる場所だからです。しかし、書籍や文書がほとんど理解できず、カンファレンスや夏期集中講座でM2の方々、そしてファシリテーターの先生の話聞き少しわかるといった状況でした。2年目となった今年は、昨年の学びがつながり、自分の進むべき方向が見えてきた気がしました。

数年前私は、子ども・保護者・教職員・地域のみなさんから愛される学校こそ子どもが輝ける学校であると考え、そのような学校を同僚の先生方と創りたいと夢を持ちました。管理職として学校運営に関わりたいという思いを実現するために、福井での学びを進めていきたいと思っています。



1年目の夏期集中で読んだ「専門職として学び合う教師たち」には福井大学教育地域学部附属中学校研究会の中で小林真由美先生の数学科としての探究の実践が報告されていました。不思議とその内容に引き込まれたことを今でも覚えています。たくさんのラインマーカーと付箋、昨年の私の学びが書き込まれていて自分の考えが変わった瞬間が記録されていました。5月に小林先生が、東京サテライトにいらっしやった時はじめて間近でお見かけしアイドルを近

くで見たようにうれしかったのですが、お声がけできず大変残念でした。Zoomの画面越しや書籍や資料の文章から私の学びを導いてくださる福井の先生方に終了までにお礼を言えるように、学びを続けていきたいです。そして、いつも近くで私を導いてくださる東京サテライトの福島先生、平沢先生、前田先生、加藤先生に感謝しています。今後ともご指導よろしくをお願いいたします。

## 現在地と今後の期待

### 授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学附属義務教育学校後期課程 櫻井 翼

7月のラウンドテーブル、月間カンファレンスに限ったことではないが、私はこういったカンファレンスに参加した後の帰り道はいつも清々しい気持ちでいっぱいになる。これは、カンファレンスが終わったという達成感から来るものもあるが、それ以上に次につながる何かを得ることができた充実感からきている。7月のラウンドテーブル、月間カンファレンスでは、教職大学院として最後の年となる今年度の実践に向けての展望を語った。私と同じグループの先生方から多くのコメントをいただき、カンファレンスに参加する前よりも今後の展望が明確化することができた。「じゃあ、次のインターン、カリキュラム実践研究ではこんなことをしてみよう！」そんな意欲が生まれていた。

7月の月間カンファレンスの午後パートでは、武生高校授業改善プロジェクトチームの歩みを描いた資料を読み進めた。校種としては中学校であるが、午前パートで校種間のつながりという話題が生まれ、私自身もインターンで中学3年生を見ていることもあって、中学校から高校への学びのつながりを見たいと思い、この資料を選択した。この資料の中で最も印象に残っている言葉は、「相似形」という言葉である。この言葉は、私が教職大学院に入学して以来、何度も聞いたことである言葉で、今の私にとっては馴染みのある言葉でもある。今回選んだ資料は、主に教師視点で書かれているものだが、それを生徒の

姿に照らし合わせた時、教師の学びと生徒の学びはよく似ているように感じた。改めて、教師の学びと子どもの学びが相似形であることを再認識することができた。

ところで、7月の月間カンファレンス終了後にこのニュースレターを書いているが、現在の私は「生徒の学びとは何か」ということを問い続けている。これまでの1年半、主にインターンを通じて生徒の様子を見てきた。そこでは、生徒の言葉、コミュニケーション、文字（生徒の考え）を中心として見取り、そこに現れる生徒の学びについて考えてきた。時には、他の先生方と生徒の学びを共有しながら、次の活動や授業の展開を構想してきた。私は、インターンでの見取りから、生徒の学びについて考えてきた。今年度、何度か実践案を書いたり、実際に実践をしたりなど、実践者の立場に立つ機会も増えてきている。その度、実践を省察していくが、毎度思うことは、私は「生徒の学び」をどのように捉えているのかという疑問である。これまでのインターンで大切にしてきた見取りの視点で大切にしてきたことが、現在の最大の問いの一つになっている。

こうした問いに立ち返ったときに、改めて「教師の学びと子供の学びは相似形である」という言葉が頭に浮かぶ。このニュースレターの冒頭で、私は教職大学院での様々なカンファレンス終了後にいつも清々しい気持ちを抱いていると書いた。そして、それ

は次につながる何かを抱いているからであった。私は、まさに私の教職大学院での姿に、私が抱いている問いへと迫る糸口があるのではないかと考えている。

今の私の学びは「清々しい」という言葉があるように感覚的なものが多く、ここで言語化することは難しいのかもしれない。しかし、近々、私は今の私の姿を捉え直す機会が訪れる。長期実践報告である。長期実践報告では、教職大学院での学び（または、それ以前までの学び）を整理し、どのように私が歩んできたのかを捉え直すことになる。私はこれまで、先輩の先生方の長期実践報告を読ませていただき、これら

は執筆者が執筆者のために書き留めているものであると認識していた。だが、7月のカンファレンスを終えて、長期実践報告は執筆者のためでもあり、紐解いていけば読み手のためでもあり、そこで現れている姿は子供たちのこれからの学びのためのものなのではないかと考えるようになった。

この思いが正しいのかは分からないが、私は「教師の学びと子供の学びは相似形である」という言葉を胸に、長期実践報告を進めていくことになるだろう。

## 前期を捉え直す

### 授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学附属義務教育学校前期課程 酒井 夏瑞

教職大学院で学び始めて、早2年と半年が経過した。3年目の半年はあっという間に過ぎたように感じる。7月カンファレンスは「前期の展開を振り返り、記録にふれ、課題をとらえ直す」がテーマであった。セッションでの語り合いを通して、前期の実践を振り返る貴重な時間だった。また、今回は長期実践報告も踏まえた省察を語ったため、長期的に自分の実践を振り返ることができる時間だった。今回、グループにストレートの院生が2人いた。省察を聞いていると、自分と同じような悩みを抱えていることを知った。

私の同期が院を修了した3月、院での残り一年をどう過ごすか毎日考えていた。自分はあと一年、ここで学びを深められると思うと無駄にはいけないという焦りもあった。私が今年度、本当にやりたいことは何か、来年から現場に出たときに子どもたちとかかわる中で役に立つことは何かと考えていた。考え抜いた結果、新しい環境でインターンシップを行うことと、研究をメインで一年を過ごすことに決めた。しかし、4月から他のインターン生が講師をしている姿や新しく入学してきたM1の姿を見ると、「本当にこの選択で良かったのだろうか…」「講師で授業実践を積みよかったかな」と考えることも多かった。振り返ると、悩みながら過ごしてきた前期だったと思う。しかし、今回のカンファレンスで他の院生も

新しい環境や、新しい挑戦で沢山悩んできたことを知った。語り合うことは、自分の心の内を伝え合うことに価値があると思っている。自分だけだと思っていた考えや悩みが、自分だけではなかったと気付くことができるのは、語り合いの良さだと思う。毎回のカンファレンスで、明日からのインターンシップを頑張ろうと思える。今回の語り合いは、私にとってあと半年を大切に過ごす自信になった。

今回のカンファレンスで一番心に残った時間は、午後の実践記録を踏まえた語り合いである。そこで伊達院生が読んだ実践記録、小嵐先生の「無意味としか思えない活動をするKくんに対して係り手としてなし得たこと」を踏まえた語り合いに響くものがあった。伊達院生は「無意味だと思ったり、その子の行動が理解できなかつたりするのは、かかわりの糸口が見えないからだという言葉にとっても共感しました。この記録を読んで子どもに無意味な行動はないと感じました。」と語った。これを聞いていた私は、インターンでかかわっている子どもを思い浮かべ、4月からの自分のかかわり方は失敗したなど思った。私は、インターンで主に2年生の子どもたちとかかわっている。今回思い浮かんだ子は、Aさんである。Aさんは普段から授業に入るのが難しく、絵を描いたり工作をしたりして授業時間を過ごしている。4月の頃、Aさんとかかわるときにその子のしていることは授

業とは関係ないと思い、授業に入られるように声をかけていた。ある意味で、その子の行動が理解できなかったためにそうしていたのだろうと思う。社会創生プロジェクトの時間や、自分の興味のある時間には積極的に活動しているにもかかわらず、授業に参加していない時間は価値がないと判断して、かかわっていたのだと思う。授業に入られるように強く接してしまっただけで、現在Aさんは鋭い表情で「あっちにいった」と私に言うようになった。現在の状況は私のかかわり方が作ってしまったものだと反省している。かかわりの糸口が見えないために、その子の行動が理解できないと壁を作ってしまった。夏休

みが明けたら、Aさんの行動を見取り自分のかかわりの糸口を見つけていきたい。残り半年は、Aさんとのかかわりも大事にして過ごしていきたいと思う。

教職大学院で学び始めて3年目の夏が始まる。今年は、2度目の夏のサイクル、研究の授業実践に向けての構想、教育実習におけるサポートなど今までとは違う新しい学びを得られる夏を送れそうだ。また、今年度は長期実践記録を執筆することになる。3年という長い実践を夏の間一度捉え直し、残り半年を大切に過ごしていきたい。

## 生徒の為の工夫を考えて

### ミドルリーダー養成コース2年/福井市役所 サンタマリア・ファン・フロレンシオ

連合教職大学院に入って、2年が経ちました。入ったばかりの私は右も左も分からないまま流れに流されたけど、毎月のカンファレンスで他の先生の話聞き、私はALTとしてどのような先生でいたいかわかってきました。今年は、もっと生徒達のニーズに合った授業をしていきたいなと思います。

私の一つのテーマとして、ALTの限界というのがあります。教育免許を持っていないし、ただの講師なのでどこからどこまで授業の計画を立てていいかわずと迷ってきたが、M1として、先輩達の実践について聞いて、自分がM2になってとりあえずやってみようと勇気が付きました。

今年度からALTの労働条件が変わりました。我々ALTは皆それぞれの訪問先を拠点とすることになりました。その点についていくつかの不安がありますが、英語担当の先生達と打ち合わせがより簡単だという一つの重要な利点があります。ある学校のある先生は今年で初めて6年英語を教えるようになって、自信がないという事で私はT1の努めを果たすようになりました。

今年度から使用される教科書ではスピーチタイムがなくなって、雄弁術が大事と私は入れると決めました。最初のユニットは生徒達はただ自己紹介する

だけ。6年生に余裕を持って発表をしてもらえないかなと思いました・・・いや、思い込んだと言えいいかな。その最初のスピーチでークラスの二人はひどいあがり症に囚われ泣き出して結局は発表が出来ず終わりました。

一回はただの偶然だと思ってユニット2で同じようにスピーチをしてもらったら、結果は一緒でした。どう工夫すればその二人がスピーチ出来るようになるか私は考えて、文部省は授業におけるテクノロジーの使用を押していると聞き、一つのアイデアにたどり着きました。次のスピーチの準備として、生徒達にチームになって、お互いの発表している姿の動画を撮って、アドバイスをし合ってもらいました。自分が納得する動画が取れたら、それをテレビでクラス全員と見る事にしました。例のあがり症の二人は大変よくできました。

7月のカンファレンスでは、M2は長期実践報告のテーマについて語り合うということで私は上記の話の語りました。グループの皆さんはその話を聞いて、ALTがこれほど生徒達のためになる授業を考えると驚きました。生徒同士で考えたり話したりさせる事が出来たかなと思って、これからも工夫していきたいと思っております。



## 事務連絡

# 教職への扉をひらく 長期インターンシップ

福井大学連合教職大学院

授業研究・教職専門性開発コース  
オープンキャンパス（オンライン）

実践力ある 21 世紀の教師を育てる  
教職大学院の先端モデル

2024 年 **8 月 19 日(月)** 13:00~15:00

参加をご希望の方は下記 QR コードから申し込み下さい。



### 学校で 1 年間週 3 日 実践経験を重ねる。＜インターンシップ＞

<b>総体を学ぶ</b>	授業づくり・生活指導をはじめ教職の総体を学ぶ
<b>仲間と学ぶ</b>	仲間や先輩と語り合う週間カンファレンス
<b>充実した支援</b>	学校の現職教師と大学院の教員がチームで支えます

### 実践と理論のサイクルをつくる。＜実践研究＞

学校での経験をとらえ返し、検討し、問い進める実践研究

### 教職への歩みを支える。＜就学支援の充実＞

教職大学院修了後の翌年度から正規教員として採用された場合、日本学生支援機構の第一種奨学金の貸与者は返還免除となります。詳細は下記リンクをご参照下さい。

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/houkoku/mext\\_02745.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/houkoku/mext_02745.html)

#### ◆当日の予定

13:00 全体説明

- ・カリキュラムの特徴
- ・免許取得について
- ・その他

14:00 現役院生との  
座談会

#### 連絡先

福井大学連合教職開発研究科（連合教職大学院）  
〒910-8507 福井県福井市文京 3 丁目 9-1  
Tel.& Fax. 0776-27-9872



入試情報の詳細

# 福井大学連合教職大学院

福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学  
連合教職開発研究科

## 学生募集

授業研究・教職  
専門性開発コース

# 確かな力と自信を持った 教師になる

### 教育実習とは違う長期インターンシップ

長期インターンシップ(1年目)・学校拠点プロジェクト研究(2年目)  
に取り組み、学校の長いスパンの中で教師の仕事すべてを学ぶ

### 現職教員とのネットワーク

福井県内・全国の現職教員と共に学び、教師としての生  
涯にわたる成長を支える確かな実践力と成長力を培う

### 国際性・外国語学力が磨ける

NIEへの短期留学、JICA教員研修との連携授業、海外  
教育機関との国際共同研究への参加が可能

NIE…シンガポール国立教育学院

### 令和7年度学生募集日程

【推薦選抜】

詳細は説明会で

#### 説明会

オープンキャンパス(オンライン開催)

日時：令和6年8月19日(月)

#### 第1回

出願期間：令和6年9月6日(金)~12日(木)

入学試験日：令和6年9月21日(土)

#### 第2回

出願期間：令和6年10月23日(水)~29日(火)

入学試験日：令和6年11月9日(土)

教職大学院修了後の翌年度から正規教員として採用され  
た場合、日本学生支援機構の第一種奨学金の返還免除と  
なります。詳細は下記リンクをご参照下さい。

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/houkoku/mext\\_02745.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/houkoku/mext_02745.html)

## 教職大学院だけのメリット

採用試験での**第1次選考一部免除**\*1

採用後の**初任者研修一部免除**\*1

\*1 各県の募集要項に基づいています

学位

教職修士(専門職)

取得可能な  
教員免許状

各種専修免許状  
小中高特支(予定)  
(要プログラム受講)

まずは気軽に相談を！

関心のある方は、

遠藤先生(endo@u-fukui.ac.jp)

笹原先生(sasahara@u-fukui.ac.jp)

まで連絡ください

福井大学  
連合教職大学院

# 在籍院生の声

学生募集

授業研究・教職  
専門性開発コース



福井大学連合教職大学院  
授業研究・教職専門性開発コース  
2023年度入学 **村上 瑠菜**  
(福井大学教育学部卒)

初めまして。私は2022年度までは福井大学教育学部に所属し、特別支援教育を専攻していました。学部生時代に一人ひとりに合った個別的な支援が重要であることを身をもって学んできましたが、さらに長期的な視点に立ち、経験を積んでいきたいと考え、教職大学院に進学しました。

大学院では、長期インターンシップにおいて、子どもたちと関わり合いながら授業研究や実践を積み重ねています。実際に先生方と一緒にサプティチャーとして授業に参加し、そこで見えてきた子どもの姿や、自身の子どもの関わり方について実践と検討を繰り返しています。週間や月間のカンファレンス、特支ゼミにおいて、様々な先生方との対話により、多様な視点で考えることができ、ここで考えたことが次の子どもとの関わりに大いに役立っています。このように理論と実践の往還をしていながら学びを深めています。これからも学び続ける姿勢を大切にしていきたいです。



福井大学連合教職大学院  
授業研究・教職専門性開発コース  
2024年度入学 **都築 智也**  
(岐阜聖徳学園大学教育学部卒)

みなさん、こんにちは。私は岐阜聖徳学園大学教育学部を卒業し、この教職大学院に入学しました。学部生時代はコロナの影響もあり、1・2年時に行くはずだった活動ができず、経験を積むことが難しい状況でした。そして、3年時の教育実習が終えたときに、今のまま教員になっても良い教育ができないと感じ、教職大学院への入学を決めました。

大学院では基本的に長期インターンシップとカンファレンスに取り組んでいます。長期インターンシップでは配属校で週に3日間インターンシップ生として入り、子どもたちとの関わり方や授業の仕方だけでなく、現職の先生方の仕事や教育観など多くのことを学べます。そして週間や月間のカンファレンスでは、インターンシップで学んだこと、感じたことを学生の仲間だけでなく他コースの先生方とも共有し、よりよい教育を探求することができます。今後も、この教職大学院で理論と実践の往還をしていながら学び続けていきたいと思っています。



福井大学連合教職大学院  
授業研究・教職専門性開発コース  
2023年度入学 **黒瀬 玲凱**  
(京大大学院理学部卒)

私は、京大大学院理学部を卒業し、この教職大学院に進学しました。進学当初は福井大学出身でないことや、教育学部出身ではないことから、周囲の学びについていけないのではないかと不安がありました。しかし、数日でこの教職大学院では、「学びについていく」という現象はそもそも起こらないということを悟りました。教職大学院は、何か新しい、最先端の知識を教授してくれる場所ではありません。インターンシップ先で観察や実践を行い、そこでの気づきを同期や先輩、先生方と語り合う中で、自らの中に新たな知見を創出し、それをまたインターンシップに生かしていく形で学びが進んでいきます。まさに「自ら学び考える力」こそ、この教職大学院での学びで求められています。この姿勢さえあれば、教職大学院で有意義な学びが得られます。私は今はむしろ、他大学出身であるからこそ、周囲と違う視点から物事を見ることができると考え、有意義な院生生活を送っています。



福井大学連合教職大学院  
授業研究・教職専門性開発コース  
2022年度入学 **渡辺 昇希**  
(福井大学工学部卒)

私は高校生活をきっかけに教師を志し、福井大学工学部応用物理学科で高校一種（理科）の教員免許を取得しました。その一方で、学部4年生での教育実習で自身の教員としての力不足を感じ、教職大学院に入学しました。大学卒業時、高校一種（理科）の免許を取得していましたが、中学一種（理科）の免許も取得したかったので、免許プログラムを履修することにしました。大学院では長期インターンシップを長く続けるからこそ経験できる生徒との関わり方や、授業を実践する上での技術を磨くことができます。また、毎週・毎月のカンファレンスでの様々な先生方との対話では、その先生ならではの経験や感じ方から学ぶことができます。免許プログラムの授業では、授業実践の中で重要になってくる知識や技能を学び直すことができます。教職大学院という新しい環境に慣れていくことは大変であると思いますが、良い先輩・同期・後輩がいる良い大学院です！是非教職大学院に来てください！

## Schedule

### 【夏期集中講座】

7/27,28,29	Sat. Sun. Mon.	Cycle1a
7/30,31,8/1	Tue. Wed. Thu.	Cycle1b
8/3,4,5	Sat. Sun. Mon.	Cycle2a
8/6,7,8	Tue. Wed. Thu.	Cycle2b
8/10,11,12	Sat. Sun. Mon.	Cycle3a
8/19,20,21	Mon. Tue. Wed.	Cycle3b
9/14,15,16	Sat. Sun. Mon.	Cycle3c (予備日)

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。  
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。  
関心がある方は、編集担当(dpdtfukui\_nl@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

【編集後記】巻頭言では、総合教職開発本部国際教職開発部が行っているマラウイ共和国の取り組みを紹介しています。こういった海外での取り組みは教職大学院にとっても重要な活動となっていますので、ぜひ、ご一読いただけたらと思います。  
夏期集中講座も始まっています。様々な研修も行われ、教職大学院にとっての「学び」の季節です。  
Newsletter は、皆様の熱い夏を応援しています。  
(N)



## 教職大学院 Newsletter No.186

2024.8.30 公開版発行

編集・発行・印刷  
福井大学大学院 福井大学・  
岐阜聖徳学園大学・富山国際大学  
連合教職開発研究科教職大学院  
Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京 3-9-1  
dpdtfukui@yahoo.co.jp